



東大比較文學會  
展覧会・カタログ評院生委員会 10周年誌

東大比較文學會  
展覧会・カタログ評院生委員会編

# 10周年誌目次

今橋 映子「カタログアーカイブの形成と展覧会批評の磁場 ——院生委員会 10 周年誌に寄せて」	01
松枝 佳奈「展覧会・カタログ評院生委員会 10 周年記念祭ラウンドテーブル傍聴記」	03
寺田 寅彦「院生委員会 10 周年に寄せて」	21
0 はじめに:古舘 遼・岩瀬 慧	24
1 展覧会・カタログ評院生委員会とは	25
1.1 院生委員会活動趣旨	
1.2 院生委員会と駒場博物館の連携	
2 院生委員会活動記録	
2.1 10 年間の活動報告及び年表	27
(年度別テーマ・駒場博物館資料室担当スタッフ一覧含む)	
2.2 『比較文学研究』掲載歴代展覧会・カタログ評題目一覧	49
2.3 院生委員による展覧会・カタログ評精選集	57
1. [寸評]「揺らぐ近代——日本画と洋画のはざまに」展 評者:永井 久美子	
2. [寸評]氾濫するイメージ 反芸術以後の印刷メディアと美術 1960's-70's 評者:佐々木 悠介	
3. [寸評]東京スカイツリー完成記念特別展「ザ・タワー～都市と塔のものがたり～」 評者:伊藤 由紀	
4. [寸評]第三回恵比寿映像祭 評者:堀江 秀史	
5. [おすすめ]殿様も犬も旅した 広重・東海道五拾三次 保永堂版・隸書版を中心に 評者:林 久美子	
6. [寸評]サラ・リプスカ —巨匠の影に 評者:松尾 梨沙	
7. [寸評]奇跡のクラーク・コレクション—ルノワールとフランス絵画の傑作 評者:實谷 総一郎	
8. [寸評]ルーヴル美術館展—地中海 四千年のものがたり — La Méditerranée dans les collections du Louvre 評者:岩瀬 慧	
2.4 歴代委員へのインタビュー集	73
倉員宏明、藤田千紘、川辺和将、定村来人、岩瀬慧、堀江秀史、任ダハム、信岡朝子、 林久美子、小泉順也、佐々木悠介、井口俊、安藤智子、伊藤由紀、永井久美子	
2.5 歴代院生委員名簿	81
3 駒場博物館関係記録	84
3.1 2006 年～2013 年までの資料室図書利用統計	
3.2 年度別 OPAC 登録図書冊数	
3.3 資料室紹介記事	

## カタログアーカイブの形成と展覧会批評の磁場

——院生委員会 10 周年誌に寄せて

2014 年 10 月 4 日

東大比較文学会編輯委員・美術博物館委員 今橋映子

(東京大学大学院総合文化研究科・教授)

2013 年秋に「展覧会&カタログ評院生委員会」が十周年を迎え、それを記念してラウンドテーブルを開催することができた。一方、2006 年駒場博物館資料室(展覧会カタログのアーカイブ)が、教養学部長のテープカットで正式に開室してからすでに七年を経て、院生委員会と駒場博物館、そしてそれに関わる教員たちの「コラボレーション」は、幸い大変順調に機能していると言える。

現在同資料室の展覧会カタログ蔵書数は約一万冊。国立新美術館の五万冊と比べれば圧倒的に少ないと見える。しかしこのたびのラウンドテーブルの最後に、美術ドキュメンタリスト・中島理壽氏からは「新美術館のカタログの多くは企画展というより公募カタログが多いため、学術的カタログの所蔵数とその濃度から測ると、駒場博物館資料室は日本一の質を誇って良いと思う」という、大変暖かい外部評価を頂き、関係者一同の長年の苦勞が報われる思いであった。

一方、院生委員会が毎年叡智を結集して作成する「全国美術館博物館文学館・企画展一覧表」は、十年の歳月を経て、大変使いやすく有益なエクセル表に成熟しており、これは院生および教員の研究教育に直接役立つものになっている。

このエクセルをもとに、(予算の関係上) 絞り込んだ学術的カタログが駒場博物館によって購入され、そしてまたこのエクセル情報をもとに充実していると目される展覧会に対して、展覧会カタログ評が執筆されて、雑誌『比較文学研究』(東大比較文学会)に毎号二本ずつ掲載される。近年ではこの執筆者に毎号、然るべき博士課程院生が(院生委員会によって) 選ばれるようになった。こうした良循環を生むべく、十年前にスタートした院生委員会だが、毎年入れ替わるメンバーにも関わらず歴代委員たちの努力によって、このシステムが見事に構築されてきたことは、改めて銘記すべきであろう。もちろんこの委員会に関わる教員および院生すべて、本務の傍ら無報酬で活動している。

\*

私たちのプロジェクトを支えているのは、日本の美術の現場に対する好奇心と、

「本」としてのカタログへの興味、そして単純に、美術や美術展が好き——というきわめてシンプルな出発点である。そして十年を経てそこに加わってくるのは、公にされるカタログ評への責任や、アーカイブを充実させようとする専門的な知恵（数年前から図書館司書の囑託によって整備が進んでいる）である。

何によらず学問的叡智を支えているのは、一次資料の徹底的渉猟と先行研究の把握、そしてそれを基盤とした学術的批評と独自の論の確立であろう。展覧会カタログ評という美術批評を、もし真摯に行おうとすれば、当然それと同じだけの作業が求められる。院生委員会と駒場博物館のプロジェクトは、それを十全なかたちで支えていると言える。

そしてまた美術館の企画展活動が、多かれ少なかれ学術的な意義と共に社会的な意義をもつとするならば、自由でいて責任のある「批評」のことばに取り巻かれるべきであろう。

このプロジェクトに関わっている教員と院生は、総合文化研究科比較文学比較文化コースに所属している。西欧美術史研究者も多いが、他に哲学、宗教、歴史、比較芸術、比較文学、日本文学、音楽などを専門とするメンバーも入り交じって、大変多彩である。従って展覧会カタログに対する姿勢もそれぞれに異なり、それがまたカタログ選択と展覧会&カタログ批評の面白さを生み出しているように思う。

院生委員会の活動は同時に、院生たちの日常においては、日頃とかく分断されやすいゼミの横のつながりを得られる機会であると共に、将来的に彼らが大学および社会に巣立っていった後、それぞれの仕事の現場で再び連携できるかもしれない「人脈」の形成に役立って欲しい、という教員の願いからも発している。

アーカイブの形成および展覧会批評という二つの機縁を通じて、院生・教員・博物館をつなぐ穏やかな人間関係が何を生み出していくのか、これからの十年また新たな試みをする「愉しみ」を大事にしていきたい——このプロジェクトの発起人の一人として心からそれを願っている。

## 展覧会・カタログ評院生委員会 10 周年記念祭ラウンドテーブル傍聴記

2014 年 10 月 1 日

2013-4 年度展覧会・カタログ評院生委員会委員長

松枝佳奈

(東京大学大学院博士課程)

去る 2013 年 10 月 5 日 (土) 15 時より、東京大学駒場キャンパス 18 号館 4 階コラボレーションルーム 1 にて、展覧会・カタログ評院生委員会 (以下、「院生委員会」と略記) 創立 10 周年記念祭ラウンドテーブル「駒場のオアシス 駒場博物館資料室への誘い-美博と院生コラボの 10 年」が、司会の寺田寅彦准教授による進行の下で開催された。比較文学比較文化研究室所属の先生方や院生のほか、外部からもアートドキュメンタリストの中島理壽氏をはじめとする専門家や一般聴衆の参加を得られ、大変盛況となった。

前半は駒場博物館資料室担当の坪井久美子氏による講演「駒場博物館資料室のこの 10 年-課題と展望」であった。以下、その概要を記すこととする。

美術と自然科学に関する企画展や収蔵品の展示を行ってきた駒場博物館では、2005 年 9 月より「図録交換プロジェクト」として全国 120 館から 1500 点を超える学際的かつ美的に優れた展覧会カタログの寄贈を受けていた。その後、資料室利用規約の制定を経て、閉架式資料室が開室したのは 2007 年 6 月 25 日である。資料室は開室以来、比較文学比較文化研究室所属の院生による院生委員会と連携し、学生が社会経験の一環として資料収集・整理の一部を担当している。

資料室の運用に関して「新着資料の東大 OPAC への登録が追いつかない」、「資料配架のスペースが不足している」などの問題が起こった。そこで九州大学附属図書館で長年勤務してきた司書の木村由美子氏が駒場博物館資料室に着任する運びとなった。木村氏の多大なる尽力の下、館名や著者名による資料請求番号 (館コード) の見直し、年報・紀要類等定期刊行物の OPAC 登録、駒場図書館との業務分担などが行われ、新たな図書館を開設するに匹敵するほどの大きな成果を上げた。

最後に坪井氏は、配布冊子である『展覧会・カタログ評院生委員会活動記録』巻末の「駒場博物館関係記録」を参照しつつ、2007 年以降の資料室の現状に触

れつつ、今後の課題や展望を語った。これまでに多くの関係者の協力を得られたことで、2012年まで学内利用者数・学外利用者ともに増加し、特に2012年は年間利用者数が初めて200人を超えて250人となった。だが坪井氏は、学部生や学外者には資料室の存在があまり認知されておらず、利用者数が伸び悩んでいる印象を受けているという。

今後は学部生や学外者へ積極的な広報を行うことで、資料室の存在とその価値をさらに周知させ、さらに現在閉架式となっている資料室を、曜日を限定して開架式とすることで、利用者の利便を図っていくという構想を披露して締めくくった。とりわけ筆者のように開室後に駒場博物館資料室を知った者にとっては、駒場博物館と同館資料室でカタログ資料の蒐集と整理に日々従事している方のご経験と当初からの資料室の歩みを一堂に知ることのできた大変貴重な機会であった。

なおその後、2013-14年度院生委員会は坪井氏の要請を受けて、学内・学外への駒場博物館資料室広報案を作成の上、2013年11月に駒場博物館に提出した。また坪井氏や今橋映子先生ら関係各位のご尽力の下、2014年度より駒場博物館資料室は週2回、書庫を開架式とする運びとなった。今後、同資料室利用者のさらなる増加が期待されている。

後半は「展覧会とカタログをめぐるこの10年-研究・教育・展覧の現場から」と銘打ち、三浦篤教授、今橋映子教授、国立西洋美術館主任研究員 陳岡めぐみ氏、比較文学比較文化研究室助教 永井久美子氏、そして比較文学比較文化研究室博士課程 堀江秀史氏が登壇し、活発な議論が行われた。

はじめに堀江秀史氏が、院生委員会のメンバーを代表し、〈修業（行）か仕事か〉と題して自身で作成した詳細なパワーポイントを用いながら、委員会の運営における利点と問題点を論じた。堀江氏は2011年から2012年にかけて委員長を務めるなど、2007年以降継続して院生委員会に在籍し活動に関わっている。

堀江氏は院生委員会の利点として以下のような点を挙げた。一、院生委員会のブログ等を活用することで研究成果を発表できる場が増える。二、美術博物館資料室で収蔵されている展覧会カタログなどの資料が自由に利用できる。三、全国で開催される展覧会への関心が高まる。四、修士・博士の区別、ゼミの垣根を越えた比較研究室の院生同士のつながりが生まれやすくなる。

一方で以下の問題点があるという。一、調査して作成した展覧会一覧表の活用

が不十分である。二、院生委員会の業務の負担が大きく、院生間で「大変な仕事を課せられている」という意識が生まれている。三、博士課程以上の委員会メンバーが少ないため、一部に業務の負担がかかっている。四、近年、参加メンバーの専門領域に偏りが生じており、学際的な交流を担保しにくくなっている。堀江氏は、特に問題点の二番を念頭に院生委員会の一連の業務を、表題にも掲げた〈修業（行）〉と表現した。この際、先生方や院生も含めフロア全体から賛否を含めさまざまな反響があったことは大変印象的であった。

以上の利点と問題点を踏まえ、今後の改善策として「年度別テーマを減らし活動の自由度を高めること」、「委員が自主的に見学会や勉強会を開催し、それらの回数を増やすこと」を提言し発言を締めくくった。

次に比較文学比較文化研究室助教の永井久美子氏が、〈初期の活動〉として院生委員会の草創期について述べた。永井氏は委員会が組織された 2004 年度と 2005 年度の二期にわたり副委員長を務めるなど、創設時から委員会に関わってきた。永井氏は、まず院生委員会の活動前史として、第一に 1999 年 8 月発行『比較文学研究』第 74 号に初めて 2 本の展覧会・カタログ評、今橋映子先生による「薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち」展」と藤田みどり先生（現・東北大学大学院国際文化研究科教授）による「大ザビエル」展」が掲載されたこと、第二に 2003 年 6 月に今橋映子先生編著『展覧会カタログの愉しみ』（東京大学出版会、2003 年）が出版されたことを挙げた。そしてこれらを踏まえると、委員会の活動は今年で 10 周年ではなく、実質 15 周年を迎えているのではないかと指摘する。

院生委員会のほかにも、比較文学比較文化研究室に所属する院生による他の活動（1985 年 3 月より発行されている『比較文学・文化論集』や、2004 年から活動を開始した「大澤コロキアム」とその発表に基づいた学術論文雑誌 *Windows of Comparative Literature* など）が存在する。永井氏は、院生委員会と他の院生による活動が互いに風通しを良くし、何らかのコラボレーションを生み出すことが可能ではないかと提案した。

委員会活動の概要に発足当初から大きな変化はないが、2006 年に東大比較文学学会ホームページ内に院生委員会のページが完成し、同年 11 月に院生委員会拡大メーリングリストが作成されたことで、活動内容の外部への発信と比較文学比較文化研究室出身者とのタテの繋がりができた。さらに人文科学系の展覧会・

カタログのみならず、自然科学系の展覧会・カタログの調査や情報整理や東京大学内の美術館・博物館の調査も並行して行われるようになった。委員会に所属する院生は、今橋先生をはじめ関係する諸先生方の教育的配慮の下、これらの調査を通じて、10年ごとの研究史の蓄積としての展覧会カタログについて研究・考察する貴重な機会を得られているとして、発言を終えた。

三番目に国立西洋美術館主任研究員の陳岡めぐみ氏が、「美術展示の現場から見た展覧会カタログ」と題して発言した。陳岡氏は比較文学比較文化研究室を修了し、現在は国立西洋美術館で展覧会の企画や展覧会カタログの編集に従事している。

陳岡氏は2004年4月から2005年1月にかけて駒場美術博物館資料室担当の院生スタッフとして駒場博物館に勤務した。駒場博物館での経験は、以後の学芸員の業務にも活かされ、大変有意義なものであったという。なお陳岡氏がこれまでに中心的に携わった展覧会は、以下の四展である。「カラー 光と追憶の変奏曲」展（2008年6月14日～8月31日）、「ユベール・ロベール-時間の庭」展（2012年3月6日～5月20日、陳岡氏は本展の企画により第8回西洋美術振興財団学術賞を受賞）、「国立西洋美術館×ポーラ美術館 モネ、風景をみる眼-19世紀フランス風景画の革新」（2013年12月7日～2014年3月9日）、以上、全て国立西洋美術館。いずれも近年国内で開催された展覧会の中で大きな注目を集め、非常に質の高い企画展として評価されているといえる。

次に陳岡氏は、現在フランス・パリで開催されている展覧会カタログに関する画期的なイベントについて紹介した。「les catalogues (カタログ)」と「Paris (パリ)」の頭文字を取った「CatalPa (キャタルパ)」という、その年にパリで発行された最も優れた展覧会カタログを選定する品評会である。クリスティーヌ・ラジェ氏らパリ在住の専門家を中心とした展覧会カタログの情報収集や評価をボランティアとして行う委員会が主催、審査しているという。その審査基準は、展覧会カタログの学術的な目新しさ、一般観衆向けとしての平易さ、そして装丁・レイアウトなど見栄えの美しさである。それらは『比較文学研究』掲載の展覧会カタログ評の選定基準とも共通する点が多く、「CatalPa」の活動は駒場博物館や院生委員会にとっても参考となるのではないかと、陳岡氏は提言した。

最後に陳岡氏自身の経験からカタログ制作の流れや課題、意見などを披露した。まず展覧会カタログ制作には三点の大きな制約があるという。第一は、研究



書とは異なり、展示作品に基づいて制作しなければならない点である。第二に予算の制約、第三に時間の制約がある。第一の制約については、全ての展示作品と実際には展示できなかった参考作品の図像を掲載することで、企画展の展示とは異なる別の展覧会をカタログの中で作り上げればある程度克服することが可能であると主張し、陳岡氏はこれを「カタログの自律化」と称した。第二の制約に関しては、日本の場合、カタログ購入者は観客全体の約3～5パーセント程度であるという現実的な問題もあり、値段や重量、部数などのコスト削減、バイリンガル版の廃止、リーフレット作成・配布による展覧会情報の細分化を求められることが多いという。第三の制約については、展覧会カタログの校了はしばしば会期開始の2、3週間前となる点、そして多くの場合、翻訳作業を必要とする点などが挙げられた。その中で企画も図録制作も翻訳も一手に引き受ける日本のキュレーターの能力や努力はもう少し評価されてもいいだろうという。それと同時に彼らを支えるドキュメンタリスト、アルバイト、インターンなど膨大な人員がカタログ制作の現場に関わっていることも忘れてはいけないと強調した。

陳岡氏は展覧会のアンケートで「展覧会は学芸員の研究成果の発表の場ではない」という観客からの意見をしばしば目の当たりにするという。日本では展覧会が画家や作品ごと、あるいはテーマ別に研究し新たな成果を公表する場として未だに認識されていないが、展覧会とは本来はそのような場である。そしてカタログは展覧会の記録であり、かつ「このような内容を伝えたい」というストーリーを伝える媒体である。陳岡氏は何よりもその伝え方が大切であると考え、かつて川本浩嗣先生（東京大学名誉教授）が繰り返し伝えられた「違う専門分野同士の人がわかる言葉でお互い語り合うこと」、「自分の分野を全く知らない人々に分かりやすく伝えること」という教え、比較文学比較文化研究室の良き伝統を常に想起するそうだ。以上のように現実的な制約はさまざまあるが、今後もカタログ制作の理想を現場で模索したいとして、発言を締めくくった。

四番目に三浦篤教授が、自身の専門分野に引きつけて「欧米の展覧会カタログの今」と題して発言した。以下、その概要を記す。はじめに駒場美術博物館館長として、十余年間資料収集のために尽力された今橋映子先生、美術博物館の担当スタッフの方々、院生委員会に対して感謝の意を表した。またこれまでの登壇者の発言から、各方面の現場の生の声が聴くことができ、非常に充実した内容でラウンドテーブルが進行していることを評価した。その上で、先の堀江氏による院

生委員会の業務負担が「修業（行）」であるという発言について、院生委員会の業務は「修行」ではなく「修業」であり、あくまでも教育的な配慮に基づくものであり、むしろ得がたいチャンスとして活用してほしいという見解を示した。

2003年に展覧会・カタログに関するシンポジウムが駒場キャンパスで開催され（その後、前述の『展覧会カタログの愉しみ』が刊行された）、主催者の今橋先生は早くから学術資料としての展覧会カタログの価値と、その収集の重要性を認識されていた。三浦先生はクリエイティブな営為の基礎には必ずこのような地道で着実な作業があり、美術史家として今橋先生の功績に改めて感謝したいと述べた。

その2003年のシンポジウムの際、三浦先生は以下三点のマネ展のカタログを比較した。①マネ死去1年後の回顧展（1884年）、②生誕100年展（1932年）、③マネ死後100年の回顧展（1983年）。作品の基本情報はどのカタログにも掲載されているが、③が最も資料の質量として優れていると評価する。とりわけNotice（作品解説）が最も豊富に掲載されているのが特徴である。優れた展覧会カタログは、基本情報のみならず、所蔵先の来歴、展覧会歴（いつどこである作品が出品されたか、どこである人物がその作品を見たかが分かること）、文献歴（ある作品がどのような文献で言及されているか）という三点が備わっており、これらが遺漏なく記述されているかどうかでカタログの質が相当変わるといえる。

1983年のマネ死後100年の回顧展以降のフランス、特にグラン・パレ（Grand Palais）で開催された国立美術館連合（La Réunion des musées nationaux）による展覧会カタログは、このようなカタログ制作の流れを踏襲している。それはルーヴル美術館とオルセー美術館に、個々の作品に関する膨大なドキュメンテーションの過去からの蓄積があるからこそ可能であった。本のコピー、記事の切り抜き、写真、手紙など、おそらくインターンが地道に集めた資料をドキュメンタリストがまとめ上げるというきわめて地道な仕事の賜物であり、さらに各作品に1本の論文に匹敵するキュレーターの解説や注が付き、数本の論文、新資料（マネのゾラに対する書簡）を含む資料、年表（戸籍謄本のレベルから本当に調べた人は数人だが、あらゆる伝記的記述に根拠の裏付けを取った）も盛り込まれている。三浦先生はこれこそがフランスの実証的美術史学の究極の形であろうと分析した。

だがこのような「先行研究の最大限の集約プラス新知見」というカタログ制作

の路線が、この 30 年間で崩れていったと指摘する。1983 年以降、フランスの展覧会カタログは Notice（作品解説）が軽視され、学術的刊行物から一般向けの画集へと変貌しているというのである。2010 年開催のマネ展カタログがその典型的な例である。作品解説はごく最低限、ビブリオグラフィーや年表は限定的で簡略化されたものであり、それまでのマネ展の学術性を完全に転倒させてしまった。代わりに高画質の図版と 20 本ものエッセイが収録されているが、いずれも何の新知見ももたらさず、論文のレベルに達していない小解説程度の浅薄なものであった。監修者はオルセー美術館の関係者などの専門家であるにも関わらず、カタログの出来映えとしてはきわめて不十分かつ不満足な結果となった。この 30 年間で起こったことは展覧会カタログにおける学術性や専門性の崩壊である。フランス国立美術館連合の展覧会でこのように低いレベルのカタログを制作することは望ましくないと三浦先生をはじめフランスの研究者たちも主張している。ルーヴル美術館のカタログはまだある程度の学術性を保っているが、オルセー美術館は以上のような傾向が著しいという。

ただこのような展覧会カタログにおける学術性や専門性の低下は世界的な趨勢であり、日本もその例に漏れない。三浦先生は過去に十数の展覧会の監修に携わってきたが、そのうちの数回は学芸員とゼロから立ち上げたものであったという。「ラファエル・コラン」展（1999 年 9 月 10 日～10 月 24 日、静岡県立美術館ほか）や「フランス絵画の 19 世紀」展（2009 年 6 月 12 日～8 月 31 日、横浜美術館ほか）などは高い学術性を持った展覧会を企画し、展覧会カタログもきわめて優れていたが、それ以降は次第にそのようなカタログを制作することが難しくなると語った。しかし単に学術性の高いカタログを作成すればよいのではなく、やはり展覧会としても成功しなければならない。つまり専門的学術性と一般向きの興行性は可能な限り両立させなければならないと強調する。そこで三浦先生は、自らが関わるができる範囲では展覧会の学術的水準を上げられるように努めていくしかないと語り、さまざまなよい条件が揃えば、現在でも学術性において良質な展覧会を開催できる可能性はまだ残っていると期待を寄せた。その例として陳岡氏が携わった「ユベール・ロベール」展を挙げ、限られた条件の中で監修者も学芸員も最善を尽くすことが重要であると述べた。

最後に院生委員会に対する今後の展望について語った。第一に展覧会は膨大にあり、その質も玉石混淆であるため、これからはさらに調査の規模を精査すべきであるという。駒場博物館資料室は予算とスペースが限られているため、展覧

会の質とテーマで絞り込むニーズはますます高まっているであろうと予測する。院生委員会に関わる学生には確かに負担があるだろうが、若手の時期にある調査に徹底的に携わるといふ貴重な経験ができること、そして質の高い展覧会カタログ評は本来一定の専門性と経験がなければ執筆できないものでありながら学生が執筆できること、これら二点考慮すれば、大変貴重なチャンスを得ていると捉えるべきであると提言し、発言を締めくくった。

最後の登壇者は、駒場博物館資料室と院生委員会に長年中心的に関わってこられた今橋映子教授であった。今橋先生は「大学教育研究と美術批評の現場から見たカタログ」という題で発言した。初めに10周年記念祭にいたるまでにさまざまな方面で尽力した関係の先生方と院生委員会のメンバーに対して感謝の意を表した。

先ほどの堀江氏による「修業(行)」という発言に関して以下の見解を示した。このような自由で率直な発言を引き出すことができたことこそ、この10年間院生委員会が継続して活動した一つの成果である。院生委員会は、言い換えれば「研究協力ボランティア」であると考えられ、ある種の修業(行)であり、仕事でもある。「謝礼は出ないが研究者の卵としてはやってほしい」という教員たちからの誘いに対して、院生がどのような反応を示すかということである。

ここから今橋先生は自身の近年の研究に触れつつ、その志の起源について発言を進めた。日本近代美術の根源に当たる時期の研究、とりわけ岩村透と雑誌『美術新報』に関わった人々の研究に取り組んでいる。その中で彼らにとって何よりも大切だったのは美術情報であり、批評の根本は美術情報であると判明した。岩村らは明治末期から大正期にかけて月ごとにあらゆる新聞雑誌から収集し整理した展覧会情報、展覧会批評、そして美術情報を掲載する『美術年鑑』を創刊したが、あまりに労力と予算がかさんだため、わずか3号で廃刊した。しかしそのような根本の作業を行う中から最高峰の美術批評に取り組もうとした彼らの姿勢から、今橋先生自身が大いに学ぶ点があったという。

翻って現代日本の展覧会にも見るべきものがあると思われるからこそ、我々は研究者の側からそれらを定点観察していくおもしろさや愉しさがあるのではないかと考えるにいたった。また当時行われたシンポジウムは幸いにも多方面から大きな反響を呼び、とりわけアートドキュメンテーション学会やその関係者の方々から評価を得られたことは大変喜ばしいことであった。その後、国立国

会図書館や国立新美術館アートライブラリーと連携して活動する機会も得られ、国レベルでも展覧会カタログをいかに重要な媒体として取り扱うかという議論が続けられている。国立新美術館は「アートコモンズ」(<http://ac.nact.jp>)という情報サイトを開設しており、現在から約3か月後までの企画展情報を各地方単位で掲載している。このサイトと院生委員会が調査している年度ごとの企画展情報一覧表の違いを挙げるならば、院生委員会の一覧表には年度の企画展情報を会期順に一挙に確認することができるという利点があり、その点で「アートコモンズ」のものよりも使いやすいという自負がある。

次に今橋先生は駒場博物館資料室の蔵書数とその規模の比較を試みた。2013年現在、資料室には約12,000冊の蔵書があるという。2011年の他の美術館における展覧会カタログの蔵書数は以下の通りである。東京国立近代美術館が52,000冊、国立新美術館が50,000冊、国立西洋美術館は西洋美術部門が9,099冊、日本美術部門が2,500冊、東京都現代美術館が49,000冊。これらの大規模な美術館の蔵書数に対して、駒場博物館資料室は約5分の1の規模であるといえる。この規模をいかに捉えるかであるが、駒場博物館資料室では予算が限定されているため、駒場の教育研究にある程度直結するものに特化して収集しており、中には美術館で収集していない重要な文学館のカタログも多数含まれていると指摘できる。国レベルではやはり文学館と美術館の間にかすかな亀裂があるように思われ、この点についても今後議論をしていかなければならない。

また毎年院生委員会が調査・作成する企画展一覧表を見て感じるのは、三浦先生の指摘とは反対に、地方美術館がかなり健闘しているということである。カタログがなかなか制作されないことも多いが、カタログを制作するわずかな企画展に非常に注力し、良質なカタログを出版しようとする意気込みが強いことが伺える。かつてはいわゆる「ご当地主義」と言われるものに突き動かされて開催されることが多かったが、現在では東京などの大都市では難しいが、地方の美術館だからこそ皆が関心を持つ展覧会が開催されるようになってきた。そのような地方美術館において、本来美術史上で見直すべき画家や工芸家、作品が発掘され再評価され、確実に実績を上げていると指摘できる。それを各美術館に伝え知らせたいが、それが容易ではないのが現実であるという。

続いて今橋先生は10年経過してもなお変化していない状況について取り上げた。まず「美術批評の場はどこにあるのか」ということについて相変わらず疑問を持たざるを得ないという。美術批評と美術研究、そして美術教育の三つの場

の間の連関は未だに離れているのではないか。美術批評の場や批評と研究の連関の場がどこに位置しているのかはまだ不明である。

そこで例に挙げたのが大規模な企画展である。現在、それらの後援には新聞社、放送局が付いていることが多い。過去に大学院ゼミで調査したところ、ある新聞に掲載された展覧会評は別の新聞には掲載されず、その展覧会自体が存在しないに等しいかのような扱いである。このような現象はどの展覧会についても当てはまり、ごくわずかに展覧会情報が掲載されたとしても、短評すら全く掲載されないという状況である。一方、明治・大正期の『読売新聞』では東京から地方にいたるまでありとあらゆる展覧会情報と批評が掲載されていたことが判明した。現代と簡単に比較することはできないが、その頃に比べて本当に様変わりしたという印象である。

また仮に新聞に展覧会評が掲載されたとしても、批判的な評であることはまずありえず、そこに客観性も網羅性も喪失しているといえる。つまり現在、新聞は美術批評の媒体ではなく、事業主体に変容していると言わざるを得ないのである。では美術雑誌はといえば、ご存じの通り雑誌数も少ない上に、雑誌の傾向に沿った展覧会のみが取り上げられている状況である。さらに画廊展は重要なものが少なくないが、その情報を網羅的に収集することのできる媒体が存在しないのが現状である。そのような画廊展情報までを細やかに拾い上げているのは、むしろ匿名のインターネットブログであるといえよう。だがそのような匿名ブログを批評と称するべきなのであるかは甚だ疑問である。

さらに今橋先生は、先に陳岡めぐみ氏が取り上げた「CatalPa (キャタルパ)」に触れた。陳岡氏によると、「CatalPa」の活動はボランティアで成り立っているというが、今橋先生は「例えばその活動を「CatalTo」と東京で始めるのはどうか」と提言した。院生委員会の1年間の業務の締めくくりとして、展覧会カタログの評価と社会的称揚を行うというものである。

ここで再び美術研究と美術批評をどう繋ぐのかという論点に戻り、さらに考察が進められた。先に陳岡氏から「展覧会は学芸員の研究発表の場ではない」という批判を受けたという話があったが、なぜ展覧会が学芸員の調査・研究の成果発表の場であってなぜいけないのかという見解を示した。そしてそれを擁護するには、良質な批評をする人間がいなければならないという。「今後日本でも厚みのある良質なカタログは駆逐されていく可能性がある」という先の三浦先生の話の踏まえ、その流れを食い止めるには「そのような展覧会やカタログはいい

のだ、一般市民としてもおもしろいのだ」と称揚できる場所があればいいのではないかと考えられる。明治・大正期はある意味で美術批評と美術研究の場が一致していた時代であり、啓蒙の時代であった。それから離れてしまった現代において、美術研究の側からいかに美術批評に働きかけていくのかということを考えることが重要であるという。

最後に今橋先生は、2013年9月に起こった美術研究と批評に関するある事件に言及して発言を締めくくった。江戸時代の視覚文化に関する展覧会が九州国立博物館と神戸市博物館で開催され、「江戸時代の視覚革命」というキャッチコピーが用いられた。実はイギリスの近世日本美術史家、タイモン・スクリーチ氏が先にこの用語を使った著書を刊行しており、スクリーチ氏が博物館側に「自らの研究の盗作であるため、謝罪せよ」と抗議したというが、博物館側は盗作でないと弁明した。その後、博物館側がスクリーチ氏の著書を会場に展示することで事態の収束を図った。教育や展示の場でどのような所から着想を得て展開させ、いかに展覧会とカタログに反映されたかという知的な根拠をはっきりと示すべきであり、それが『展覧会カタログの愉しみ』を出版した理由の一つであったと語った。それでもまだ今回のスクリーチ氏の件のような摩擦は、美術研究と美術批評、美術展示の場の中に齟齬が生じていることを示す現象ではないだろうか、このような点についても登壇者や聴衆と議論を交わしたいとして、発言を締めくくった。

続いて二部にわたったラウンドテーブルの登壇者5名と司会の寺田先生を中心に、フロア全体も参加できるディスカッションが行われた。議題は大きく分けて以下の二点であった。1. 今橋先生が挙げた「批評の場はどこにあるのか」という問題と、2. 同じく今橋先生が匿名ブログに触れた際に挙げた「美術アマチュアの反応が学術のプロや専門家に与える影響はいかなるものか」という問題である。

まず「批評の場はどこにあるのか」という問題について、今橋先生以外の登壇者がそれぞれ意見を語った。まず一人目、三浦先生の発言の概要は以下の通りである。新聞や雑誌などのメディアで批判的な展覧会評を掲載するのは難しい。これは非常に大きな問題であるが、残念ながらそのような傾向が共通して見られる。実質、展覧会評・カタログ評を掲載する場はないに等しい。自ら新聞や雑誌以外の媒体で展覧会評・カタログ評を展開する場を創設するしかないだろう。そ

して展覧会は最終的に消滅し、後にはカタログだけが残る、ということだけは確かであることを改めて指摘しておきたい。

司会の寺田先生の指名により、次に発言したのは陳岡氏であった。欧米に比べて、日本には美術ジャーナリズムはないに等しいという。その点で趣味やボランティアの形でありながら、展覧会カタログが縦横に語られるフランスの「CatalPa（キャタルパ）」はうらやましい限りである。

自身が携わった「ユベール・ロベール」展は外部からの予算がほとんどない「自主展」の範疇に入る展覧会であったが、共催者『東京新聞』のみならず、『朝日新聞』や『読売新聞』にも展覧会評が掲載された。各新聞社の文化記者に確かな資質があり、個人的に関心とモチベーションを持って取り上げてくれたからだろう。他社が後援している展覧会であってもやろうと思えば、その評を掲載することは可能であるのではないか。また、確かに批判されるのは企画側にとっては辛い部分もあるが、やはりきちんと展覧会を批評、評価してほしいと望んでいる。

美術批評の媒体として新聞が機能するのは率直に言って難しいと考えられる。その代替となるのは、インターネットのアートブログや Facebook や Twitter などのソーシャルネットワークサービスである可能性があるだろう。陳岡氏が学芸員としての勤務を始めた 7 年ほど前は、アートブログはまだそれほど知名度がなかったが、現在では企画・主催者の側から進んでブログの管理者や執筆者をレセプション等に招待するほどにまでその影響力が強くなった。アートブログは、展覧会の後援である企業間の利害に関わらず外部の立場から自由に展覧会について論じるため、よい宣伝媒体ともなっている。しかしそこで起こりうる問題は美術館側とアートブロガーの関係性が強くなると、本来の意味での批判、批評が成立しにくくなることである。

一方で最近、美術館関係者の間で話題となっているのが、フランスの美術批評サイト *La Tribune de l'Art* である。フランス国内外のあらゆる展覧会について、かなり批判的な内容も含めて批評や紹介を行っている。日本でも、それと同じように有志がホームページなどを立ち上げて客観的な立場から自由に展覧会を紹介し批評することが可能だろう。

三番目に坪井氏がカタログ収集に携わる立場から、美術批評の場の位置につ



いて発言した。それぞれのカタログにはやはり制作された時期や時代の特徴が如実に反映されているように考えられるという。その点から見ると、カタログの制作側は、カタログを受容する側のニーズを汲み取り合う必要があるだろう。一般の来館者は美術館や新聞社などの主催者が抱える諸事情については知り得ることがないまま展覧会を見せられ、最も不自由な思いをしているに違いない。目玉となる作品を一点掲げるような、いわゆる「一点豪華主義」の展覧会ばかりに観客が集まり、それ以外の展覧会や展示には人々は見向きもしないという状況はますますひどくなるばかりである。長年にわたって美術業界がそのような流れを作ってしまったのではないか。一般の観客が、どの展示がおもしろいのかというような個人が肌で感じた情報をつかみにくくなっていることは、大変不幸であると思われる。より研究者など専門性の高い立場からアートブログなどを活性化して、一般の人々にさまざまな種類の情報や批評を提供していくことが求められているのではないだろうか。

続いて永井氏が発言した。概要は以下の通りである。この10年で最も大きく変わったことは、ネット環境の発達である。2005年3月まで淡交社から刊行されていた『世界の美術館と企画展ガイド』ならびに『日本の美術館と企画展ガイド』が廃刊となり、2004年度以降は、院生委員会において展覧会情報を収集する際にも、美術館・博物館のホームページを参照することが増加した。大日本印刷株式会社が運営する artscape (<http://artscape.jp/mdb/mdb.php>) など、開催中の展覧会一覧を提供するサイトが現在存在するが、委員会において毎年全国の展覧会情報を網羅し、その情報を蓄積してゆくことは、展覧会の長期の動向を追う学術的な調査となりうるだろう。

永井氏は専門の日本中世美術研究の立場から、いわゆる「国宝ウォッチャー」たちのアートブログにも触れた。国宝が出品される機会を調べあげ、各地の展覧会に足を運ぶ情報収集力と行動力にあふれた彼らと比較して、研究者の卵として何ができるのかと考えた時に、作品が出陳される展覧会の学術的批評を行うことが挙げられる。若手に展覧会カタログ評を執筆できる場を開いている『比較文学研究』は貴重な媒体である。その一方で、批評で展覧会を取り上げたことで果たしてそれが美術館・博物館の現場にとってプラスに働くか否かという点も再考してみる必要があるだろう。また、先に提案したように院生主体の『比較文学・文化論集』などに展覧会やカタログ評を掲載する場合、十分吟味することが

肝要であると考えられる。

最後に堀江氏が発言した。まず三浦先生が「良質な展覧会評やカタログ評の執筆は本来院生ができる仕事ではない」と語り、司会の寺田先生が「そのような機会を得られることはチャンスである」と助言したことに対し、院生委員会のメンバーとして大変な恩恵を受けられていると実感していると述べた。一方で権威を持たず、プロでも専門家でもない、いわば信頼性がゼロという環境の中で、今橋先生が言及したような「東大という看板」を借りて、もしくは先生方にそれを背負っていただきながら、院生が美術批評の一端に関わることや、半プロやアマチュアという立場で自らブログを立ち上げて批評することが、どれだけ評論や批評として成立するのかは疑問であると感じたという意見で締めくくった。

その後、再び三浦先生が発言し、陳岡氏が言及した *La Tribune de l'Art* について補足した。同サイトにおいて、2012年にパリのオランジュリー美術館と東京のブリヂストン美術館で開催された *Debussy. La Musique et les Arts* 展に関する大変辛辣な批評が署名入りで発表された<sup>1</sup>。このような現象は、少なくともフランスではそのような展覧会に対する批評や批判が機能していることの証左であると思われるが、日本ではそのような批評が行われていないことが大変残念でならない。

次にフロアから比較文学比較文化研究室を修了した三上真理子氏が質問を行った。三上氏によると、ドイツのインターネットブログではアマチュアや専門外であるからこそ美術批評を行うという風潮が強かったように思われたという。そこで登壇者に対し、「アマチュアの展覧会やカタログに対する反応が学術のプロや専門家に与える影響はどのようなものであるか」という質問を投げかけた。司会の寺田先生はまず美術展示の現場に直接関わる陳岡氏を指名した。陳岡氏は一般の人々の展覧会に対する意見や感想がどのようなものであったか非常に気になるという。特に観客の7~8割が専門外の人々であることを考慮すると、アマチュアのインターネットブログにおける展覧会批評はマジョリティの評価や反応を知る指標となるだろうと語った。

続いて今橋先生が批評を行う立場として質問に答えた。先に堀江氏が「研究者

---

<sup>1</sup> Daniel Couty. *Debussy. La Musique et les Arts*. mercredi 28 mars 2012.  
<http://www.latribunedelart.com/debussy-la-musique-et-les-arts>

として成熟していない院生が展覧会カタログ評を執筆していいのだろうか」という率直な意見を述べたことに触れつつ、匿名でなければアマチュアが自由に批評を行うことは全く構わないという見解を示した。実名を公表するということはそれだけ執筆内容に責任を負うということであり、批評行為とは個人の責任のもとに行われる言論活動であるため、それさえ全うすれば関わることは可能であろう。今橋先生は、院生が『比較文学研究』に展覧会カタログ評を執筆する際には必ず、執筆者がどのような分野の研究者で、どのような立場からその展覧会を批評するのかを明らかにした方がよいと助言しているという。そうすることで一般の良識的な観客がその展覧会を鑑賞した結果を正確に伝えることができると思う。その点からも、実名を公開したアマチュアが展覧会やカタログを批評することは十分可能である。一番問題であるのは、やはり匿名の批評や発言ではないか。ただ Twitter などにおける匿名の感想は、マジョリティの感触を得るには一つの大事な調査媒体であることには相違無く、排除すべきではないだろう。

その後再度三浦先生が発言を行った。問題は専門性を持った人々がどこまで批評することが可能かという点であるという。三浦先生のように企画・監修側として深く関わっている専門家は、立場上なかなか批評しづらいと明かした。新聞社が、自社が後援した展覧会以外を取り上げないのは、展覧会の動員数に関わってくるため、ある意味必然であろう。そこで今橋先生は「だから新聞社は言論主体でなく、もはや事業主体である」と応じた。三浦先生はそれを肯定した上で、今橋先生のような立場の専門家が客観的な言論主体を立ち上げ、業界にあっても腹を割って批判的な議論する覚悟を持たない限り、中立的に美術批評を展開することは難しいと提言した。

最後に今橋先生より、外部から本ラウンドテーブルにご出席いただいたアートドキュメンタリストの中島理壽氏の紹介があり、中島氏より貴重なご意見をいただくことができた。中島氏は 1975 年より東京都美術館美術図書室司書として勤務して以来、日本のアートドキュメンテーションの第一人者として、日本近現代美術を中心とした多数の美術書誌・年譜・年表・年史の編纂に携わってきた。また駒場博物館資料室の活動にもご賛同いただき、資料の寄贈など大きな支援を賜っている。

中島氏は、第一に予算など展覧会カタログをめぐる昨今の状況は大変厳しいと指摘した。近年刊行されているカタログはドキュメントとして不十分なものも少なくなく、おそらくそのようなドキュメンテーション作業は、大学院生や大学院を修了したばかりで、経験の浅い若いインターンやアルバイト、非常勤研究員によって担われていることが多いように思われる。それを真正面から批評することは、未来のある彼らにとって大変厳しいことであり、そのような状況は大変憂慮しているという。やはり批評とその対象は対流しないといけないのであり、批評して批評されることで互いにレベルアップしていくように努めなければならない。展覧会を企画する側は次々と順番に担当を回し、会期に追いかけるように準備をしていくため、その時々への批評に向き合うことが少なくなってしまうだろう。

さらに中島氏は、展覧会カタログの裏には会期の直前までに払われた制作者や制作会社の多大なる苦労があることを忘れてはならないと語った。中島氏は最近も MoMA の東京展カタログや日本における西洋美術批評史の年表や参考文献一覧の作成に携わったとのことであるが、それらの校正が届いたのは会期の一週間前のことであったという。中にはポンピドゥー・センターのように前もってカタログを完成させるような良識のある美術館もあるが、世界的に見てもカタログ制作の労力は計り知れないものがあるという。そして中島氏は今後カタログ制作の場で文献目録や年表の制作に関わる若手の研究者や学芸員は、下手なオリジナリティを追求するのではなく、良質な見本を真似て忠実に制作してほしいという希望を述べた。さらに現在、日本は美術館同士の情報の共有が全くないことも問題点として挙げた。

中島氏はこれまで延べ 100,000 冊以上の展覧会カタログに接してきたそうだが、公立美術館に収蔵されているカタログの一定数は、公募展や新作コレクション展のものであるという。その点、駒場博物館資料室は企画展カタログに特化して収集してきたため、その数や質は日本で一番であり、資料の寄贈も受け付けていることにも感謝すると高く評価した。今後も駒場博物館や院生委員会から展覧会カタログに関する質問や相談などがあればいつでも歓迎であるという大変ありがたい言葉をいただいたところで、発言を終えられた。

最後に司会の寺田先生が、カタログ制作の経験から本ラウンドテーブルで触れられなかったある重要な側面について言及した。それは美術作品を展覧会に

貸し出す所有者・コレクターの存在である。そのような所有者やコレクターたちが作品をより多くの観客に鑑賞してもらいたいという熱意がなければ、展覧会は成立しない。寺田先生は「したがってこの場に出席した院生委員会のメンバーをはじめとする若い院生は、展覧会やカタログをただ漫然と消極的に消費するのではなく、より積極的な消費者として、大きなチャンスと捉えて展覧会やカタログに関わる活動に携わってほしい」という期待を述べて、会を締めくくった。盛大な拍手の中、こうして3時間に及ぶ濃密なラウンドテーブルは幕を閉じた。

傍聴記の最後に、今回のラウンドテーブルに参加し、10周年を迎えた院生委員会委員長として2013年度から2014年度にかけて委員会の取りまとめに携わった筆者の感想や考察などを、それぞれの登壇者の発言に寄せながら記しておきたい。

最初の登壇者であった堀江氏が提示した院生委員会の利点と問題点は、いずれも筆者を含めた院生委員会メンバー内で日々話題となってきたものである。それらを10周年の節目となる行事において正式な形で公表した堀江氏の尽力に、院生委員会に関わる院生の一人として改めて感謝の意を表したい。そして今後の委員会活動が参加する院生の負担を軽減しつつも、より充実したものとなるように知恵を絞りながら引き続き活動に携わっていきたいという思いを新たにした。

二番目の登壇者、永井氏が提示した「院生の活動のコラボレーション」に、筆者は大きな関心を寄せた。『比較文学・文化論集』の誌上で寄稿や座談会といった形式で、院生が個々の展覧会や展覧会カタログのあり方について議論することも可能であろう。また「大澤コロキアム」において、展覧会カタログについて英語で討論することも大変魅力的に思われる。このように院生活動のコラボレーションを通じて、院生同士が展覧会カタログへの関心や知識を深め、そこで得られた知見を個人の研究にも有機的に還元していくことは、今後の院生委員会の活動の質的な充実性を高める上でも一つの良案であるのではないだろうか。

さらに今回、駒場博物館や院生委員会の活動を熟知し、かつ展覧会カタログ制作の現場の第一線で活躍する陳岡氏から、学内では知り得ない制作側のきわめて貴重な意見や経験談を聴く機会に恵まれたことは、院生委員会メンバーにとって大変幸福なことであっただろう。フロアの活発な反応からも登壇者や聴衆の関心が非常に高かったようである。陳岡氏のように比較文学比較文化研究室

出身の方が美術展示の第一線で活躍していることは後輩としても大きな励みになると思われる。今後もこのように現場の話を直接伺うことができれば、カタログ制作という営為が研究にもたらす大きな影響や、制作に伴う課題などについて、委員会メンバーをはじめとする院生がより一層理解を深めることができるであろう。

学術的批評性に富んだユーモアを交えつつ美術史家と展覧会監修者としての確かな見識を随所に盛り込み、聴衆から反応や議論を喚起する三浦先生の発言は圧巻の一言であった。展覧会とカタログにおける学術性と興行性という大きな課題に対する見解や解決策を、過去からの展覧会史と日仏を中心とした世界的な展覧会の趨勢を手がかりとして鮮やかに示す手法は、筆者のように研究者を志す院生にとって学ぶべき点が多くあったに違いない。

最後の登壇者であった今橋先生は、美術研究と美術批評、美術展示・教育の場をつなぐために美術研究がいかにあるべきか、そして美術批評の場がどこにあるのかという壮大かつ難解な問題に対し、駒場博物館資料室と院生委員会は、これまでの展覧会カタログの調査・収集・整理の作業に加え、「CatalTo」などの新たな活動を展開することで、今後さらに建設的に貢献できるという可能性を提示されたことは、きわめて意義のあることであった。これらの提言は今後の院生委員会の活動の活性化のために反映されることが予想される。

我々院生委員会に携わるメンバーをはじめ、美術研究や美術批評に関わる若手研究者や院生は、今回登壇者の方々がラウンドテーブルで掲げたような高い志と優れた学問性や見識を継承していくことが不可欠である。そしてそれらをより発展させながら、改めて展覧会や展覧会カタログに真摯に向き合い、今後美術研究や美術批評に関わる諸問題の解決に取り組む姿勢が求められているのではないだろうか。

## 院生委員会 10 周年に寄せて

2014 年 10 月 1 日

美術博物館委員 寺田寅彦

(東京大学大学院総合文化研究科・准教授)

10 年という年月は大学院という環境では長い期間であり、東京大学比較文学比較文化研究室で生まれた展覧会・カタログ評院生委員会がその創立 10 周年を迎えることができたということは、委員会を構成する大学院生と教員、そしてなによりもその活動の場である駒場博物館資料室の真摯で地道な活動の賜物である。その、創立 10 周年記念祭ラウンドテーブル「駒場のオアシス 駒場博物館資料室への誘い-美博と院生コラボの 10 年」の司会を、まだ駒場での経験が浅い私が拙いながらも務めさせていただくことになったのだが、常日頃から感じていた院生委員会の良質な活動成果が、さまざまな参加者の高い意識によるものであったことをあらためて確認できた場となった。

ラウンドテーブルの内容についてはよい傍聴記もあり、私があらためて繰り返すべきことは何もない。ただ、このラウンドテーブルは、10 年の間に熟成したワインを一本取り出してその芳香と味わいを楽しむという貴重なひとときに匹敵する場であったのであり、メンバーが一堂に会することであらためてその活動の質の高さを多くの人が実感できたと思う。そこで、私は司会の立場として、ラウンドテーブルという場だからこそ生まれた化学反応にも似た豊かな議論について、簡単にここで記しておきたい。

院生委員会はその名の通り大学院生が主役である。彼ら院生は、それぞれのテーマにそった研究を遂行するために大学院の扉をたたいた高い志をもった学生の集団だ。そのような大学院での生活の当初のプランに、展覧会・カタログ評という活動は組み込まれていない。それにもかかわらず、限られた時間を割いて院生委員会に参加する多くの学生が有意義な活動を行い、自身の大学院生活を実りあるものにしていく。もともと予定されていないこのような活動こそが、とすれば文献資料とのにらめっこになりがちな大学院生活に豊かな彩を与えているというのは、考えてみれば興味深いことである。駒場博物館資料室担当の坪井

久美子氏による講演の中でも彼ら学生の活動の様子が紹介されていたが、この大学院生活と院生委員会の両立という問題がとくにラウンドテーブル後半の議論で大きな論点となった。

いわば参加学生の代表として登壇した比較文学比較文化研究室博士課程の堀江秀史氏からの発言は、まさにその論点に正面から切り込んだ点で、司会である私にとってはたいへん貴重でありがたい発言だった。堀江氏は院生委員会の活動を「修業（行）か仕事か」と問いかけ明快な問題提起を行ったが、それに対してなされたパネラーの発言の詳細は傍聴記を参考にさせていただければと思う。ところで実は司会である私は、この問題提起を答を出せない問いかけ、あるいは答を出すべきではない問いかけと感じつつ司会をしていた。大学院という場は各学生が行う研究そのものが「修業（行）か仕事か」という性格をもつから、ということだけではない。大学院生活そのものが解が一つに決まったものではないからである。誰もが大学院の門をくぐった時になにがしかのプランを持っているものだが、そのプランは意義ある研究成果を挙げれば挙げるほど変貌を遂げていき、彼らの院生生活はプランにはなかった思わぬ道筋をたどるものである。それぞれの学生に異なるプランがあり、そして違った研究生活の展開があるものなのだ。そこにある答はたった一つではない。十人十色の答があると言ってもよいだろう。

ラウンドテーブルでも同じようにさまざまな意見が出された。それらの発言は互いに異なる見解を持ちながら、同時にいずれの発言も院生委員会の活動が有意義なものであることを確認するものになっていたことは、その場にいた誰もが感じたことだと思う。この議論の結論には唯一の解というものがない。しかし、だからこそおのおの異なる研究テーマを持ち、それぞれが違う研究環境を持ちながら、院生委員会の参加者誰もがそれぞれの成果を手に行っているという事実が説明できるのだろう。司会は往々にして結論に向かって議論を導く役割を担う。しかし、このラウンドテーブルでの私の役割は、委員会に参加する誰もが違った解を導いてよいのだ、という開かれた議論を成立させることにあったと思う。私がそれに成功したかどうかは自分では判断がつかないが、しかしパネラーの説得力あるさまざまな発言のおかげで、その議論は幅が広く奥行きのあるものになっていたのではないかと思っている。

私は司会の締めくくりに、展覧会をめぐるいかに多くの人々が必要とされているかを述べた。議論を一つにまとめると言うよりは、さらに広く発展してい



くように議論の方向を向けたと言ったところだろうか。具体的には美術作品を展覧会に貸し出す所有者・コレクターの存在のことを例に挙げたが、もちろん一つの展覧会、そして展覧会カタログはそれだけでできあがるわけではない。むしろ文字通りの縁の下を支える多くの力によって成立しているものである。だが、ある展覧会・展覧会カタログのために力を寄せる多くの存在に目が向くことで、展覧会・カタログ評院生委員会に関係する院生の興味がさらに広がることを願ったのである。

ワインはただぶどうの汁一つからできるわけではない。小さなさまざまな作用が重なるように働きあって、豊かな味わいを醸し出していく。これからの院生委員会の活動も、いろいろな考え方ともの見方があることでさらによい成果を生み出していくことを、司会という立場から感じた一日だった。

## 0 はじめに

駒場博物館資料室は、国内外の展覧会カタログなどの貴重な資料を10年にわたり収集してきました。その収集には、総合文化研究科・比較文学比較文化研究室の院生委員が運営する「展覧会・カタログ評院生委員会」（以下、院生委員会）が大きく関わってきました。院生委員会では、全国約 200 の美術館、文学館などのミュージアムで、その年ごとに開催される展覧会の情報を調査し、展覧会調査一覧表としてまとめています。この展覧会調査一覧表をもとに、駒場博物館のスタッフが配架資料を選定・購入し、資料室の蔵書を年々充実させています。加えて院生委員会では、東大比較文學會が発行する学術雑誌『比較文學研究』に毎号掲載されている「展覧会・カタログ評」の対象となる展覧会と、その評者を毎年推薦してきました。これまで歴代委員と教職員によって受け継がれてきた10年間の重みを噛み締め、院生委員会の足跡を活字に記録することを目的とし、この冊子が作成されました。

内容は大きく3つに分かれています。まず1では、院生委員会の活動趣旨を紹介し、駒場博物館との連携図などをあわせ、その役割を簡潔にまとめています。2では、主要な5つの院生委員会活動を記録しています。年度毎の院生委員会の仕事は、年表で概観できます。次いで、我々の活動の主眼のひとつである「展覧会・カタログ評」の題目を過去に溯り、全てを一覧にまとめて掲載しました。また、院生委員が主体的に残した近年の成果として、東大比較文學會ホームページ内の院生委員会掲示板に執筆した展覧会・カタログの寸評やおすすめ記事がありますが、その粋を集めた寸評精選を特集しています。さらに、本記録のために実施した歴代委員へのインタビューからは、院生委員の生の声が伝わってきます。活動記録の最後には、歴代院生委員の名簿一覧をまとめました。過去の活動から、現委員の活躍へと眼を移していただけることでしょうか。

3は、駒場博物館に関する記録となっています。3.1では、資料室の利用状況——具体的には2007年度以降の学内、学外の利用者別での、当日閲覧・貸出・特別貸出などの利用状況、複写依頼、利用図書合計などが一目でわかるようになっています。併せて利用者数推移もグラフにしています。最後に資料室紹介記事では、利用者から見た資料室という観点から、「アート・ドキュメンテーション通信」に掲載された見学記を紹介しています。

本冊子の作成には、今橋映子教授、比較文学比較文化研究室、駒場博物館、東大比較文學會のご協力を得ました。ここに感謝の意を表します。

展覧会・カタログ評院生委員会委員長 古舘 遼

10周年記念イベント委員長 岩瀬 慧

## 1 展覧会・カタログ評院生委員会とは

### 1.1 院生委員会活動趣旨

東大比較文學會より年2回発行されている学術雑誌『比較文學研究』には、毎号2～3本の「展覧会・カタログ評」が掲載されます。これは、全国の美術館・文学館などのミュージアムで開催される展覧会のうち、比較文学比較文化研究に通じるような、学際的な企画展に注目し、学術刊行物としての展覧会カタログと併せて批評するもので、多彩な専門分野をカバーする当コースの卒業生・大学院生によって執筆されています。

「展覧会・カタログ評院生委員会」は、若手研究者の執筆の機会を拡大するという目的のもとに、比較文学比較文化研究室の在学生によって2004年10月に組織されました。主な活動内容は、全国のおよそ200館のミュージアムで開催される企画展の年間スケジュールを調査した上で、博士課程以上の大学院生及び卒業生の中から、展覧会・カタログ評の執筆者、ならびに評の対象となる展覧会の候補を選定し、『比較文學研究』の編輯委員会に推薦する\*というものです。発足以来、委員会による展覧会・カタログ評が、毎号1～2本ほど掲載されています。

\*当委員会の役割は『比較文學研究』編輯委員会に推薦することであり、実際に執筆された展覧会・カタログ評の最終的な採否は、『比較文學研究』編輯委員会の査読によります。

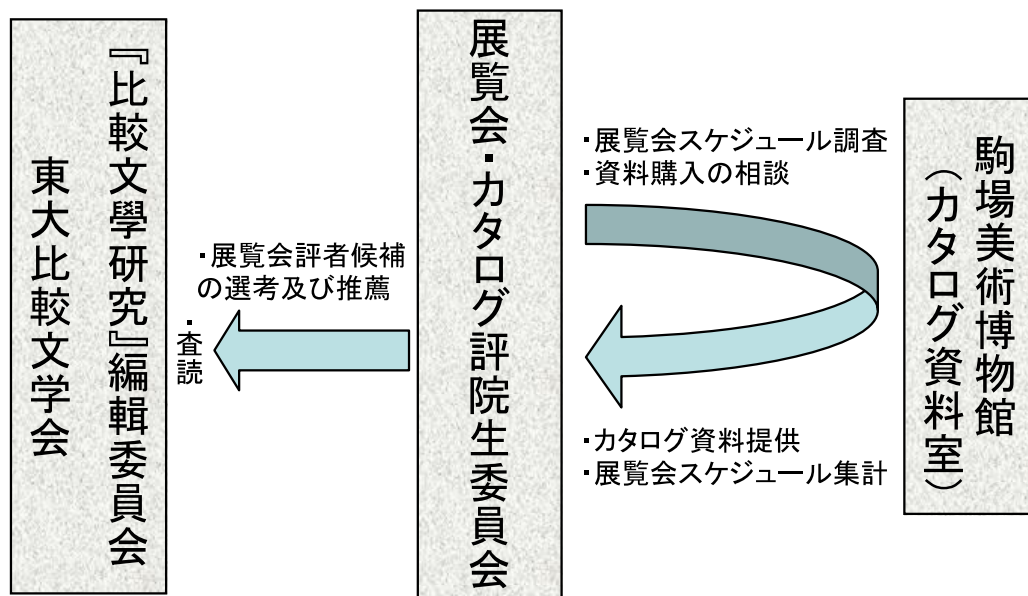
→参照：<http://www.todai-hikaku.org/policy.php>



## 1.2 院生委員会と駒場博物館の連携

委員会が全国各地のミュージアムで催される企画展の年間スケジュールを調査する際、その集計には駒場博物館の協力を得ています。また、委員会が推薦した展覧会の他、有力な候補に挙げられた展覧会にあわせ発行されたカタログは、館のカタログ資料室に納められます。評者が執筆の際に利用できるだけでなく、手続きの上で、学外の方も良質な展覧会カタログを閲覧できる、国内でも有数のコレクションになっています。利用方法については駒場博物館 HP をご覧ください。

→参照：<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/library.html>



連携図

## 2 院生委員会活動記録

### 2.1 10年間の活動報告及び年表

#### 第1回 2004年度 (2004年10月～2005年7月)

委員長：信岡朝子 副委員長：永井久美子 副委員長：林三博  
駒場博物館スタッフ：陳岡めぐみ

2004年10月28日(木) 第1回ミーティング 1) 各係、役職、任期、今後の活動内容の決定 2) 第2回ミーティングの日程を設定

2004年11月25日(木) 第2回ミーティング 『比較文学研究』第86号に推薦するカタログ評の展覧会/評者候補の確定

1) 「HANGA 東西交流の波」展 (東京藝術大学大学美術館、2004年11月13日～2005年1月16日) 2) 「西洋が伝えた日本/日本が描いた異国」展 (印刷博物館、2004年9月11日～12月12日) 3) 「フルクサス」展 (うらわ美術館、2004年11月20日～2005年2月20日)

2004年12月中旬 第86号に推薦するカタログ&展覧会、ならびに評者の最終決定 「フルクサス」展 (うらわ美術館)：小林将輝さん

2005年2月18日(金) 編輯委員会より小林将輝さんに正式依頼書類を送付

2005年4月8日(金) 代々木でのオリエンテーションにて、展覧会・カタログ評院生委員会の活動紹介ならびに新委員募集

2005年4月22日(金)

第1回ミーティング 1) 第87号の展覧会&評者候補の選出 2) 展覧会&美術館情報の収集手順 3) 簡単なマニュアル作成の段取り 4) 新委員候補の選出と引継ぎ日程の決定

2005年4月～5月中旬 2005年度全国展覧会開催予定表の作成 (全員分担)

2005年5月6日(金) 第2回ミーティング 1) 展覧会一覧の調査・作成経過報告 2) 作成中の展覧会一覧を参考に、候補展覧会を選出

2005年5月19日(木) 第87号のカタログ&展覧会評の候補展ならびに評者候補の選定に関するアンケートメールを全委員に送付

2005年5月24日(火) 第87号の展覧会評に関するアンケートの集計結果をメールにて報告 \*展覧会候補+評者候補選定

- 1) 「アジアのキュビスム—境界なき対話」展 (東京国立近代美術館(本館)、2005年8月9日~10月2日)
- 2) 「アジアの潜在力—海と島が育んだ美術」展 (愛知県美術館、2005年5月24日~7月10日)
- 3) 「ロシア民族学博物館アイヌ資料—ロシアが見た島国の人びと—」展 (川崎市市民ミュージアム、2005年7月2日~8月28日)
- 4) 「東アジア中世街道—海商・港・沈没船—」展 (国立歴史民俗博物館 2005年3月23日~5月22日 大阪歴史博物館、2005年7月6日~9月5日 山口県立萩美術館・浦上記念館、9月17日~11月27日)
- 5) 「アール・デコ—きらめくモダンの夢—」展 (東京都美術館、2005年4月16日~6月26日)
- 6) 「庭園植物記」展 (東京都庭園美術館、2005年9月3日~11月6日)
- 7) 「ジェームズ・アンソール—ベルギーが生んだ異端の芸術家」展 (東京都庭園美術館、2005年4月23日~6月12日)
- 8) 「浦和アトリエ村—画家と郊外」展 (うらわ美術館、2005年7月16日~10月10日)
- 9) 「ウナセラ・ディ・トーキョー ANOHIANOTOKIO—残像の東京物語 1935-1992」展 (世田谷美術館、2005年4月23日~5月29日)
10. 「ブラッサイ—ポンピドゥーセンターコレクション」展 (東京都写真美術館(2階)、2005年8月6日~9月25日)

2005年5月~6月 上位候補展から各院生評者候補に打診

2005年7月25日（月） 駒場博物館所蔵ポスター（1000枚）選別作業 新旧委員引継ぎ作業 懇親会

2005年8月22日（月） 第87号に推薦する展覧会&カタログ、ならびに評者の決定 「アジアのキュビズム—境界なき対話」展（東京国立近代美術館）：前島志保さん

### **第2回 2005年度（2005年10月～2006年7月）**

委員長：佐々木悠介 副委員長：信岡朝子 副委員長：永井久美子  
駒場博物館スタッフ：松尾薫、杉山菜穂子

#### **<2005年後期>**

2005年10月27日（木） 第1回ミーティング 第88号に推薦する展覧会及び評者の候補検討 1) 「ベトナム近代絵画の軌跡」展（東京ステーションギャラリー、2005年11月5日～12月11日） 2) 「東京—ベルリン／ベルリン—東京」展（森美術館、2006年1月28日～5月7日）

2005年10月下旬 第88号に推薦するカタログ&展覧会、ならびに評者の最終決定 「東京—ベルリン／ベルリン—東京」展（森美術館）：曾我晶子さん

2005年11月～12月 第89号の展覧会カタログ評に推薦する評者の検討 2005年度購入の展覧会カタログ発注作業（2004年度開催分） 2001年度～2003年度開催の展覧会カタログ在庫調査及び発注（各美術館、古書店） \*今橋映子先生研究室坂田亜希子さん及び駒場博物館杉山菜穂子さんと共同作業

#### **<2006年前期>**

2006年4月～5月 2006年度の主な企画展日程調査、エクセル表作成

2006年6月 第89号推薦評者の候補検討 メール→打ち合わせ 1) 「台湾の女性 日本画家生誕100年記念 陳進」展（福岡アジア美術館、2006年7月30日～9月10日） 2) 「京都に咲いた洋画の「花」—浅井忠と関西美術院」展（府中市

美術館、2006年8月26日～10月9日) 3) 「山名文夫と熊田精華—絵と言葉のセンチメンタル」展 (目黒区美術館、2006年6月24日～9月3日) 4) 「ポーランド国立ウッチ美術館所蔵 ポーランド写真の100年」展 (松濤美術館、2006年7月25日～8月27日) 5) 「森鷗外と美術—石見人森林太郎、美術ヲ好ム」展 (島根県立石見美術館、2006年7月14日～8月28日 和歌山県立近代美術館、2006年9月10日～10月22日 静岡県立美術館、2006年11月7日～12月17日) 6) 「ドガ、ダリ、シャガールのバレエ—美術の身体表現」 (ポーラ美術館、2006年9月23日～2007年3月18日) ※9月からの展覧会のため、詳細は来期に検討。

2006年7月24日(月) 新旧委員引継ぎ作業 展覧会・カタログ評研究会 懇親会 \*研究会ゲスト(カッコ内は合評者) 陳岡めぐみさん「もうひとつの楽園」展評(手島崇裕) 前島志保さん「アジアのキュビズム—境界なき対話」展評(深見麻) 曾我晶子さん「東京—ベルリン/ベルリン—東京」展評(永井久美子) 小林将輝さん「フルクサス」展評(佐々木悠介)

### **第3回 2006年度(2006年10月～2007年7月)**

委員長：手島崇裕 副委員長：安藤智子 副委員長：林久美子  
駒場博物館スタッフ：小泉順也

2006年7月24日(月) 新旧委員引継ぎ ※引継ぎ終了後、第1回ミーティングを待たず、HP掲載内容に関して、広報・HP担当と相談係を中心に議論(HP作成作業が予定より早まったため)。

7月25日(火) 見学会 「国宝「隨身庭騎絵巻」と男の美術」展(大倉集古館) 2005年度2006年度両委員による試み

9月7日(木) 駒場博物館収書計画WG第1回ミーティング 収書計画WGもHP同様、前倒しで活動開始。 ※駒場博物館収書計画WGについて・・・駒場博物館、特に同館資料室(カタログを所蔵)の充実をはかる。同室に必要で、かつ入手可能な美術資料、工具書、辞書類を検討し、購入にそなえる。OB・OGがかつて資料室の立ち上げにかかわった先輩方の意見も参考にさせて頂く。また、同室は2007年7月より一般の蔵書閲覧・利用が許可されるので、資料室の利用法についても院生の目線から意見を提言する。



9月14日（木） オーバル（HP制作会社）さんとのHPに関する打ち合わせ 正・副委員長とHP制作担当者さんとの会議。

10月5日（木） 第1回ミーティング 議題 1) 各委員の仕事分担、仕事内容の確認 2) HPの作成状況報告と掲載内容の検討 3) 駒場博物館収書計画WG 第1回ミーティング内容報告 4) 『比較文學研究』90号に推薦する展覧会・評者候補の選定 主な候補（執筆候補者については省略） ・「石内都」展（写真美術館、9月23日～11月5日） ・浦上玉堂展（千葉市美術館、11月3日～12月3日） ・「ルソーの見た夢、ルソーの見る夢」展（世田谷美術館、10月7日～12月10日） ・「森鷗外と美術」展（静岡県立美術館、11月7日～12月17日） ・イメージの迷宮に棲む、柄澤齊」展（神奈川県立近代美術館鎌倉館、10月28日～12月24日） ・「揺らぐ近代、日本画と洋画のはざままで」展（東京国立近代美術館、11月7日～12月24日）

10月13日（金） オーバルさんとのHPに関する打ち合わせ 委員長とHP制作担当者との会議。レイアウト第2校受け取り。

11月22日（水） 拡大MLの立ち上げ ※前々期・前期の委員やカタログ委員会関係者を含む拡大版ML。ゆるやかなつながりを保ち、登録メンバーとの研究上のリンク継続を期待。

11月22日（水） 第2回ミーティング 議題：『比較文學研究』90号推薦展覧会、及び評者の候補選定 追加候補として、「ぼくらの小松崎茂」展（逋信総合博物館）が挙がる。

12月7日（木） 第90号に推薦するカタログ&展覧会、ならびに評者の最終決定 「イメージの迷宮に棲む、柄澤齊」展（神奈川県立近代美術館鎌倉館）：安藤智子さん

12月8日（金） 見学会 「ビル・ヴィオラ：はつゆめ」展（森美術館）

12月26日（火） HP仮公開

2007年2月20日（火） 駒場博物館収書計画WG第2回ミーティング

3月12日（月） 国立新美術館アトライブラリー、バックヤード等見学会

4月1日（日）HP公開

4月1日～末日 2007年度展覧会開催調査

4月28日～6月13日 2007年度比較文学比較文化コース所属院生専門分野アンケート

6月1日（金）『比較文学研究』91号推薦展覧会、及び評者の候補選定開始（MLを利用）

6月25日（月）駒場美術博物館資料室開室式（同室見学会及び懇親会）への参加

7月5日（木）第3回ミーティング 議題：『比較文学研究』91号推薦展覧会、及び評者の候補選定 主な候補 1) 「パリへー洋画家たち百年の夢」展（MOA美術館） 2) 「ル・コルビュジエ」展（森美術館） 3) 「舞台芸術の世界 —ディアギレフのロシアバレエと舞台デザイン」展（東京都庭園美術館） 4) 「青山二郎の眼 白洲正子の物語も小林秀雄の骨董もこの男から始まった」展（世田谷美術館） その他、9月以降開催の展覧会数点

7月9日（月）第91号に推薦するカタログ・展覧会、ならびに評者の最終決定 「大正シック」展（静岡県立美術館）：深見麻さん

7月23日（月）新年度委員会への引継ぎ

#### **第4回 2007年度（2007年10月～2008年7月）**

委員長：林久美子 副委員長：手島崇裕 副委員長：韓程善 副委員長：定村来人

駒場博物館スタッフ：小泉順也

2007年7月23日（月）引継ぎ及び第1回文学館プロジェクトミーティング 全体での引継ぎ式の前に、2007年度の企画である文学館プロジェクトの第1回ミーティングを行う。（韓程善さんが作成した全国の文学館リストから各文学館で行われた展覧会・カタログを調査し、どこの文学館の企画が充実しているか把握する。） →10月末までに分担して調査

10月4日(木)「夏目漱石」展見学会及び第1回ミーティング 「夏目漱石」展(江戸東京博物館)見学 ミーティング内容 ・『比較文学研究』92号に推薦する展覧会・評者候補の選定について、第2回ミーティングまでに各自候補を絞る ・候補選定に関して、委員である任期の1年のうち、1回は展覧会情報を寄せる ・HP活性化のため、展覧会情報を積極的に寸評欄に載せる

11月19日(月)第2回文学館プロジェクトミーティング 各文学館の調査をした感想から、文学館、カタログの充実度を把握 →今後調査すべき文学館リスト(林久美子さん作成)

11月27日(火)第2回ミーティング 議題:『比較文学研究』92号推薦展覧会、及び評者の候補選定 ※前委員会からの引継ぎ、及び事前のメールリストでの意見交換なども踏まえ、以下の候補に絞る。 1)「パリへ 洋画家たち百年の夢」展(林久美子さん)→確定 2)「パラオーふたつの人生 鬼才・中島敦と日本のゴッホ・土方久功」展(→その後、菅原克也先生のご推薦で下見兼評者候補を蔡暉映さんに) 次点「北斎—ヨーロッパを魅了した江戸の絵師」展(江戸東京博物館、12月4日~2008年1月27日) 次点「誌上のユートピア 絵画と美術雑誌の交感—1889~1915」展(神奈川県立近代美術館葉山館、2008年1月26日~3月9日)→会期終了間近なため、「百学連環」展は見送り

2008年1月10日(木)「文学館情報およびカタログリスト」(韓程善さん作成)

2月4日(月)「美術博物館資料室で購入したカタログリスト」(小泉順也さん作成)をMLで配布

3月26日~ 展覧会情報調査に加えるべき文学館最終確認(今橋映子先生・小泉順也さん・韓程善さん・定村来人さん・林久美子さん) →4月3日 調査に追加する文学館リスト(韓程善さん作成)

4月4日（金）比較文学比較文化コース オリエンテーションにて 当委員会の紹介と院生に対する専門分野アンケートのお願い

4月6日（日）「2007年度末に資料室で購入した文学館カタログリスト」（小泉順也さん作成）

4月7日（月）～27日（日）2008年度展覧会情報調査

5月19日（月）2008年度展覧会情報リスト MLにて配布

5月27日～6月4日 2008年度比較文学比較文化コース所属院生専門分野アンケート調査

5月27日（火）MLを用いて『比較文学研究』93号推薦展覧会、及び評者の候補選定開始 92号の候補であった「パラオ」展（蔡暉映さん）を93号の候補として再推薦

6月8日（日）2008年度院生専門分野アンケートリストMLにて配布

6月12日（木）『比較文学研究』93号に「パラオ」展（蔡暉映さん）を推薦確定

6月22日（日）・メール等で挙げられた93号推薦展覧会候補を10点に絞る ・「大岩オスカー」展（立花拓さん）のみ評者も候補として挙げられる ・会期終了間近だったため、下見なしで直接見学してもらおう → 7月13日「大岩オスカー」展（立花拓さん）内定

7月18日（金）引継ぎ（93号の推薦展・評者正式決定） 議題：93号の推薦展について「大岩オスカー」展（立花拓さん） → 正式決定

## 第5回 2008年度(2008年10月～2009年7月)

委員長：安藤智子 副委員長：佐々木悠介 副委員長：林久美子  
駒場博物館スタッフ：小泉順也

2008年11月25日(火) 1)『比較文学研究』94号に推薦する展覧会カタログとその評者の推薦を選考 西田桐子さん(D1)、「沖縄・プリズム(1872-2008)」展 川島健さん(OB)、「十二の旅-感性と経験のイギリス美術」展  
2) 今後の検討課題として挙げた展覧会 「石内都」展(目黒区立美術館)、「杉本博」展(金沢21世紀美術館)、「蜷川実花」展(オペラシティー)、「アーツ・アンド・クラフツ」展(松下電工汐留ミュージアム)、「生活と芸術—アーツ・アンド・クラフツ」展(東京都美術館)、「ミリオンセラー誕生へ！」展(印刷美術館)、「氾濫するイメージ」展(うらわ美術館)、「朝鮮王朝の絵画と日本—宗達、大雅、若沖も学んだ隣国の美」(栃木県立美術館、静岡県立美術館)、「レオナルド・フジタ」展(上野の森美術館)、「アジアとヨーロッパの肖像」展(神奈川県立歴史博物館・神奈川県立近代美術館葉山館) 3) 文学館プロジェクトについては、2007年度の文学館プロジェクトを踏まえた上で、2008年度は調査対象となる文学館を20程度に絞り、それについての調査は美術館の調査と一緒にすることにする。文学館プロジェクト独立して行われるのではなく、上記の展覧会調査に吸収されることを確認。

6月8日(月) 1)『比較文学研究』95号に推薦する展覧会カタログとその評者 大嶋仁先生(福岡大)、「福沢諭吉」展が決定されたことを報告 吉岡知子さん(埼玉県美、D2)、「日本の表現主義」展を委員会として推薦・以下の展覧会について引き続き候補として検討することを確認 「太宰治と美術」展(青森県立美術館)、「維新とフランス」展(東京大学総合研究博物館)「白樺派の愛した美術」展(宇都宮、神奈川県立近代美術館葉山館)、「京都学」展(京都国立近代美術館) 2) 展覧会調査リストに追加する美術館を検討

7月17日(金) 2009年度新メンバーへの引継ぎ会：新旧メンバーの顔合わせ、次年度の展覧会情報調査のフォーマットの検討、寺田寅彦先生から「展覧会カタログについて」のお話

※展覧会カタログ、評者についての情報共有。

11月12日(木) カタログ委員会で必要な展覧会カタログ購入の呼びかけ

11月28日(土) 2009年度購入の展覧会カタログのリストを配布(小泉順也さんより)

3月12日(木)～4月20日(月) 2009年度展覧会情報調査を依頼

5月8日(金) 2009年度展覧会情報調査リストを配布

5月1日(金)～5月12日(火) 2009年度院生専門分野アンケートを依頼

6月6日(土) 2009年度院生専門分野アンケートリストを配布

#### ※その他

8月8日(土)「コロ展」(国立西洋美術館)見学会

4月6日～4月7日 比較研究室のオリエンテーションにて活動内容の紹介、チラシの配布、駒場博物館資料室の見学

### **第6回 2009年度(2009年10月～2010年9月)**

委員長：定村来人 副委員長：安永麻里絵 副委員長：任ダハム

駒場博物館スタッフ：川野恵子

2009年7月17日(金)引継ぎ会 新委員の役割分担。MLメンバーリストの更新。2009年度委員会の活動目標：1) 全国企画展一覧表(エクセル表)の精緻化及び利便度の向上。2) HP上の「展覧会寸評」ブログの活用。3) 駒場美術博物館カタログ資料室との連携の強化。資料室利用方法の見直し。

7月18日～21日 全国企画展調査用エクセル表フォーマット改善についてメールでのやりとり(第1回)。7月29日～31日 調査リストから抜けていた美術館、博物館の追加作業(第1回)

11月17日～25日 全国企画展調査用エクセル表フォーマット改善についてメールでのやりとり(第2回)及び担当委員と委員長の小ミーティング(20日)

11月26日(木)第1回委員会ミーティング ミーティング内容

- ・全国企画展調査用エクセル表フォーマット改善について担当委員からの説明。  
→フォーマットは例年通りのものを使用。巡回展の抜出しを作業内容に加える。
- ・『比較文学研究』96号に推薦する展覧会・評者候補の検討。→「木村伊兵衛とアンリ・カルティエ＝ブレッソン」展(東京都写真美術館、2009年11月28日～2010年2月7日)の下見依頼を決定。

→その他、「白樺派が愛した美術」展（神奈川県立近代美術館葉山館）、「太宰治と美術」展（青森県立美術館）、「ファッションの欲望 ラグジュアリー」展（東京都現代美術館）、「DOGU」展（大英博物館）と「国宝 土偶」展（東京国立博物館）などが候補に挙げられた。

駒場博物館カタログ資料室の利用環境に関して委員の意見を聞く。→新着カタログの扱いについての提案。→リクエストのシステム化についての提案。→委員代表と駒場博物館のスタッフの方との間でミーティングの機会を設ける。

・HPの「展覧会寸評」ブログの活用方法について意見交換。→駒場博物館カタログ資料室の新着カタログの書誌情報をアップすることを検討。→内覧会に行った人は「内覧会報告」をブログで行うようにする。

12月7日（月）今橋映子先生、委員長（定村来人さん）、副委員長（安永麻里絵さん）の三者ミーティング・第1回委員会ミーティングで話し合われた内容について確認。

・11日に予定されている駒場博物館スタッフ（坪井久美子さん）とのミーティングに向けて、話し合うべき内容の確認。

・『比較文学研究』96号に推薦する展覧会・評者候補に関して：→「木村伊兵衛とアンリ・カルティエ＝ブレッソン」展は取り上げないことに決定。→「杉浦非水」展（宇都宮美術館）を新たに有力候補として挙げる。→その他の候補：「オブジェの方へ—変貌する「本」の世界」展（浦和美術館）、「ターナーから印象派へ」展（府中市立美術館）、「江戸の粋・明治の技 ZESHIN 柴田是真」展（三井記念美術館）など。

12月11日（金）第1回駒場博物館×院生委員会ミーティング・院生委員会メンバーの資料室利用について：→現委員及び過去に委員を経験した現役院生は、平日（月～金、10:00～18:00）は事務室で鍵を借りて資料室に入り（開架式として）利用することができることとする。→そのため院生委員会は現役院生の委員メンバーのリストを作成して駒場博物館に提出する。→駒場博物館は特別利用フォームをより使いやすいものに改定する。→新委員になる人々は引継ぎのときに特別利用フォームを受け取り、その場で今橋映子先生の印をもらえるようにする。

・新着カタログの扱いについて：→駒場博物館は、新着カタログを優先してOPAC登録できるように図書館と交渉する。→駒場博物館の事務室内に新着カタログ

のコーナーを設ける。→新着カタログ情報を院生委員会 HP のブログにアップする。

・カタログ購入のリクエストのシステム化について：→駒場博物館は、図書館の Web リクエストサービスを使ってリクエストができるように図書館と交渉する。→院生委員会は、全国企画展年間リスト制作後に委員会の総意としてのカタログ購入リクエスト（あくまでも希望として）をまとめ、駒場博物館に提出するステップを設ける。

2010年1月21日（木）『比較文学研究』96号掲載展覧会・カタログ評は、三井記念美術館「ZESHIN 柴田是真」展、執筆者は定村来人さんに決定。

1月29日（金）新着カタログ情報のブログ掲載開始。

3月9日（火）駒場美術博物館に新着カタログコーナーを設置。また、4月から図書館のWebリクエストサービスを使ってリクエストができることが決定。司書の木村由美子さんのご尽力によりカタログ資料のOPAC登録がほぼ終了。

3月10日～29日 オリエンテーション用資料作成作業（メール連絡）。

4月2日～11日 調査リストから抜けていた美術館、博物館の追加作業（第2回）。

4月5日（月）、6日（火）新入生オリエンテーション

5日は委員長が新入生に委員会の説明をする。懇親会では新入生の勧誘を行う。

6日は駒場博物館の協力を得て、新入生及び現委員を対象に駒場博物館及びカタログ資料室の見学を行う。

4月13日（火）全国企画展調査を各委員に依頼。作業開始。

4月23日（金）現役院生の現・拡大委員メンバーのリストを作成して駒場博物館に提出。

5月5日（水）2010年度全国企画展一覧、完成版をMLで配布。

5月7日（金）院生専門分野アンケートへの協力を比較のML上で依頼。



6月1日（火）来季への引継ぎの日程を決定。（休み明けの10月に引継ぎを行うことを決定）

6月6日（日）院生専門分野アンケート結果、完成版をMLで配布。

7月13日（火）来季委員へメールで引継ぎの連絡。

9月2日（木）来季委員のMLへの登録。

9月28日（火）駒場博物館スタッフと次期委員長の顔合わせ、委員長の仕事（駒場博物館関連）の引継ぎ。

9月30日（木）委員長、次期委員長、次期副委員長の引継ぎミーティング。

10月4日（月）引継ぎ会 1) 引継会（15:30～17:00） 2) 駒場博物館「カタログ感謝祭」（17:00～18:00）資料室で副本が2冊目以上あるカタログおよそ300冊を、院生委員を務めてきた学生に譲ってくださるというイベント。 3) 懇親会（19:30～21:30）

2009年度委員会の成果： 1) 全国企画展一覧表のいっそうの充実を図ったこと。（調査対象ミュージアムの大幅追加、巡回展把握をよりシステムティックに行う工夫。） 2) HP上のブログを情報交換の場として利用する新たな試みを行ったこと。（内覧会報告、新着カタログ情報のアップ。） 3) 駒場博物館スタッフとの話し合いの場を持ち、資料室の利用方法の見直し、新着カタログの扱い（新着カタログコーナーの設置）、カタログ購入リクエストのシステム化（Webリクエストサービスの利用）につなげたこと。

#### ※2009年度委員会の反省点

- ・全国企画展年間リスト制作後に院生委員会の総意としての購入リクエストをまとめ、駒場博物館に提出するステップを設ける案が出ていながら、今年度はそれを実行しなかったこと。
- ・院生専門分野アンケートフォームの見直しを行わなかったこと。
- ・ブログが本来の「展覧会寸評」の場としては、まだまだ十分に利用されていないこと。
- ・展覧会の見学会を行わなかったこと。

## 第7回 2010年度（2010年10月～2011年9月）

委員長：井口俊 副委員長：李ヒョンジュン 副委員長：堀江秀史  
駒場博物館スタッフ：川野恵子、安永麻理絵

2010年 10月4日（月）新年度引継ぎ会 1) 新委員の役割分担（「ブログ利用」「見学会企画」の役割を新設） 2) 「全国企画展調査」「院生専門分野アンケート」「HP・ML管理」前年度委員からの引継ぎ事項の確認 3) 新年度委員会の活動目標設定 4) 委員会メーリングリストの更新

10月10日（日）東大比較文學會総会にて前年度委員会の活動及び、新年度委員会の発足を報告。

11月2日（火）第1回 委員会ミーティング 1) 新委員による引継ぎ報告 2) 「展覧会寸評」欄の活性化に向け投稿時のフォーマット作成に関する意見交換 3) 『比較文學研究』に推薦する評者、展覧会候補の検討 →「橋本平八と北園克衛」展（世田谷美術館）、「大正イマジュリィの世界」展（渋谷区立松濤美術館）、「日本の新進作家展vol.9 [かがやきの瞬間] ニュー・スナップショット」展（東京都写真美術館）などが候補に挙がり、「橋本平八と北園克衛」展を委員会で見学し、「大正イマジュリィの世界」展、「ニュー・スナップショット」展には委員が下見に行くことを決定。

11月 企画展調査の際に用いるエクセル表の刷新、委員会専用メールアドレスの取得に関してメールでやり取りを行う。→データの集計作業の簡便化を可能にするエクセル表の作成。HP上に企画展情報が掲載されていない美術館、文学館に問い合わせるための共有メールアドレスを取得する。

12月12日（日）展覧会見学（於世田谷美術館） 1) 「橋本平八と北園克衛」展を委員有志で見学。見学の前には本展担当学芸員である世田谷美術館の野田尚稔さんより、展覧会、展覧会カタログの内容解説をしていただいた。  
2) 『比較文學研究』へ推薦する展覧会を「橋本平八と北園克衛」、評者を博士課程水野太朗さんに決定。

2011年1月～3月 駒場博物館担当者へ新所蔵資料のリクエストを提出。4月に行われる新入生オリエンテーションにおいて行う予定の、駒場博物館見学会の打ち合わせをする。

3月 東日本大震災により被害にあった文化施設、文化財の状況、今後の対応等を今年度から追跡調査することを決定。それに伴い、「震災影響調査」を行うための新たなエクセル表を作成するべく打ち合わせを行う。

4月17日（日）比較文学比較文化研究室 新入生オリエンテーション → オリエンテーション内で委員会の説明、懇親会では新入生の勧誘を行う。本来は、オリエンテーションの2日目に新入生と共に駒場博物館および、カタログ資料室の見学を行う予定であったが、震災によりオリエンテーションの日程が変更となったため中止となった。

4月25日（月）第2回 委員会ミーティング 1) 新年度「全国企画展調査」に向け、担当委員から新エクセル表の説明、調査日程の確認 2) 「震災影響調査」を開始することを正式に決定 → 被害状況及び、休館情報、企画展の延期・中止などの情報を収集し、リスト化していく。2010年度だけの調査ではなく次年度以降も継続的に調査を行い、しかるべき時期に発表を行う場を設ける。

4月26日～5月8日「全国企画展調査」「震災影響調査」エクセル表を各委員に配布し、作業開始。

5月12日（月）駒場博物館との打ち合わせ →2010度から新たに用いた2種の調査表をどのようにカタログの収集等に利用していくか意見交換。集計が済んだ調査表の最終チェックは駒場博物館担当者が行うことを確認する。

5月25日（水）企画展調査表の完成版を委員会メーリングリストにて配布 6

月6日：院生専門分野アンケートを比較院生メーリングリストにて依頼 7月

17日：院生専門分野アンケートの完成版を比較院生メーリングリストにて配布

7月5日（火）次年度引継ぎに向け、現委員長、新委員長による第1回ミーティング

9月5日（月）委員長による第2回ミーティング 9月13日：相談係の永井久美子さん、信岡朝子さん、本年度で任期満了の旨、お伝えする。

10月4日（火）新年度引継ぎ会

### **第8回 2011年度（2011年10月～2012年9月）**

委員長：堀江秀史 副委員長：伊藤由紀 副委員長：川辺和将

駒場博物館スタッフ：安永麻里絵、申ミンジョン

2011年10月4日（火）新年度引継ぎ会 議題 1) 委員会の性格・仕事内容の紹介 2) 役決め 3) 震災影響調査（2010年度実施）をどのように活かしていくか 4) 調査票の今後について

10月 引継ぎを各自進める。

11月4日（金）第1回委員会ミーティング

議題及び決定事項等 1) 引継ぎ状況確認 2) ブログ活用検討 3) 展覧会評推薦者選定 →以下の展覧会を、評の候補として挙げる。それに適した評者には別途打診を始める。

「生誕125年記念 萩原朔太郎」展（世田谷文学館）、「谷川俊太郎と絵本の仲間たち 堀内誠一・長新太・和田誠」（ちひろ美術館・東京）、「瀧口修造とマルセル・デュシャン」（千葉市美術館）、「渋谷ユートピア 1900 - 1945」（渋谷区立松濤美術館）、「脱ぐ絵画—日本のヌード 1880 - 1945」展（東京国立近代美術館（本館））

11月 ブログ活用に関して、「ブログ管理」の林久美子さん、「ブログ企画」の藤田千紘さん、佐藤弥生さんを中心に、継続的な改革の検討が始まる（～2012年9月）。

改革済み内容は以下。

カタログ評委員会ブログの変更状況について（2011 - 12年度） 作成：藤田千紘さん

#### **【これまでの変更点】**

1) カテゴリの分類（2011年11月）記事の一覧表示画面で、展覧会寸評と駒場博物館情報が混在していたのを修正。

現在は、〈東大比較文學會トップ〉→〈掲示板〉→〈展覧会・カタログ評院生委員会〉で全記事の新着情報が表示される。また、上記のページから〈展覧会寸評〉へ進むと、寸評のみの新着情報が表示される。

2) 記事へのタグ付け (2011年12月～) 各記事の内容に沿って、[寸評][美博][おすすめ]のタグを付与。(過去の記事も遡ってタグ付け済み)

[寸評]…従来の展覧会寸評 [美博]…駒場博物館からの新着資料情報など [おすすめ]…新カテゴリ。3～5行くらいの短い記事。展覧会紹介など

3) 投稿フォーム但し書きの変更 (2012年5月) 従来「東大比較文學會会員のみ投稿が可能です。」→現在「東大比較文學會会員および東大比較文学比較文化研究室所属の院生のみ投稿が可能です。」

4) HP仕様変更企画書の作成 (2012年5月) HPの仕様変更について企画書案(※別紙)をまとめ、今橋映子先生へ提出。

5) 比較MLでのブログ更新情報通知 (2012年6月～) ブログの更新情報を比較MLに投稿し、周知を図る。

—以上、ブログに関する変更点。その他、次年度以降も改革を継続中。

12月4日(日) 関連企画見学(「シンポジウム 展覧会カタログを斬る」 於国立新美術館) 当委員会にも関係の深いテーマに関して、今橋映子先生はじめ有識者による講演と討議が行われ、委員の多くが聴講した。

12月 駒場博物館担当者へ新所蔵資料のリクエストを提出。

2012年3月1日(木) 第2回委員会ミーティング 議題及び決定事項等

1) 2012年度展覧会調査に使うエクセル表の仕様について →2010-11年度に抜本的な票の改革が行われたが、それをどのように引き継いでいくかについて、話し合いが持たれた。従来版(2010年度以前)は、エクセルについて、基本的なノウハウのみが用いられており、引継ぎが比較的容易に行えることが魅力であったが、新票(2010-11年度)は、各委員の調査結果を集計する際の作業量が少ない(時間的に早くできる)点に魅力がある代わりに、割り振り担当者と取りまとめ担当者(駒場博物館担当者)に高度なエクセルの技術が求められるという問題(2011年度委員会のみならず、今後どのように引き継いでいくかという問題)があった。会議の結果、集計作業の簡便化には相当な利点があると判断されたため、以下の通り、新票の作成者である刀根直樹さん、古舘遼

さんに票の簡素化等を施して頂いた上で、新票を引き継いでいくこととなった。

\*簡素化内容 (・削除項目：「震災影響」、「会期関係特記事項」、「イベント」、「内部伝達事項」 ・変更項目：「副題」入力欄の位置変更、「特設ページ」を「参考URL」と名称変更 ・保留項目：「キーワード」※「キーワード」は、統計上の有効性が考えにくい点から削除の案が出るも、とりあえず2011年度は使用しないこととし、今後の使用の判断はその都度の委員会に委ねることとした。)

\*マニュアルの変更内容 ・昨年配布された2種類の入力者用マニュアルを一つに統一。(・今後、館を追加(あるいは削除、変更)する必要がある場合、そのときの担当者が確実に変えられるよう、担当者用マニュアル(「展覧会情報の集計」や「キーワード集計」も含めたもの)を作成してもらおう。※なお、2011年度はこのように判断したが、将来万一不都合が生じたときのために、従来版は委員長が元データを代々引継いでいくこととする。)

2) 震災影響に関して →2010度に行われた特別な調査は、今年には行わないということに決まる。なお、昨年度に集まったデータは、今橋先生に内容を見て頂き、今後の動向を判断して頂く。

3) 『比較文学研究』展覧会・カタログ評欄の今期委員会推薦者 →以下の2名に決定。・98号 金志映さん「生誕125年 萩原朔太郎」展(世田谷文学館)・99号 任ダハムさん「開館30周年記念特別展渋谷ユートピア1900-1945—帝都をのぞみ、武蔵野に棲む—」展(松濤美術館)

4) 東大比較文学會寸評ブログ活性化企画

4月3日(火)～4月4日(水) 比較文学比較文化コース 新入生オリエンテーション →オリエンテーション内で委員会の説明、懇親会では新入生の勧誘を行う。オリエンテーション2日目には、新入生と共に駒場博物館及び、カタログ資料室の見学を行った。

4月10日～24日 2012年度展覧会調査

5月 展覧会調査の結果を駒場博物館担当者が集計、完成した表を各方面へ送付、共有。

7月 院生専門分野アンケートの実施、送付。

10月4日（木）新年度引継ぎ会 委員長・古舘遼さん、副委員長・西田桐子さん、岩瀬慧さんの新体制で発足。

12月21日（金）東大比較文學會総会にて、活動報告。

### **第9回 2012年度（2012年10月～2013年9月）**

委員長：古舘遼 副委員長：岩瀬慧 副委員長：西田桐子

駒場博物館スタッフ：申ミンジョン

2012年10月4日（木）新年度引継ぎ会

議題 1) 調査票説明、調査マニュアル、震災影響調査の検討 2) ブログ活性化へ向けて →担当ごとの引継ぎ、委員長への報告。

10月31日（月）第1回ミーティング

議題 1) 引継ぎ状況確認 2) ブログ活用検討 →SNSなどの併用について検討（今後、引き続き検討することに） 3) 展覧会・カタログ評で取り上げる展覧会、執筆者について全メンバーより募った案を検討 →議論と投票の結果、以下の展覧会を選定。

・「維新の洋画家 川村清雄」展（江戸東京博物館）／評者候補：申ミンジョンさん ・「アートと音楽-新たな共感覚をもとめて」展（東京都現代美術館）／同：三松幸雄さん・「国立トレチャコフ美術館所蔵 レーピン展」（Bunkamura ザ・ミュージアム）／同：松枝佳奈さん  
→「維新の洋画家 川村清雄」展を見学することに決定

11月17日（土）第1回見学会

「維新の洋画家 川村清雄」展（江戸東京博物館）見学。  
見学後、同展担当者の落合則子さんよりお話を頂く。その後、館内のカフェでお茶会。

12月20日（木）委員長引継ぎ

前委員長、現委員長の間で、委員長の作業について再度確認。引継ぎ方法について見直し。

2013年1月12日（土）第2回見学会

「生誕100年 松本竣介」展（世田谷美術館）見学。見学後、渋谷で懇親会。

3月6日（水）第2回ミーティング

議題 1) 展覧会・カタログ評の依頼について報告（委員長より）

「維新の洋画家 川村清雄」展（江戸東京博物館）、「アートと音楽-新たな共感覚をもとめて」展（東京都現代美術館）の両展覧会について、候補者より執筆の承諾を得た。「国立トレチャコフ美術館所蔵 レーピン展」

（Bunkamura ザ・ミュージアム）については10月に議論が尽くされなかったため、再度決議し、承認。

2) 新MLの不具合について →後日、無事利用可能に。

3) これまでに執筆された展覧会・カタログ評のWebサイトへのアップについて（前委員長より）

4) ブログの活性化について

→リレー形式による執筆、海外に渡航した委員への執筆依頼を決定。

辛重官さんより、写真掲載と、ミラーブログの運用について提案。今後の検討課題に。執筆のための目安を作成することに決定。ブログ担当者、副委員長に依頼。

5) 展覧会調査について（加来杏沙子、農頭美穂さんさんより）

→調査期間を2011年度より前倒し、4月23日を〆切とすることに決定。

巡回展については、調査票の備考欄にできるだけ記載。取りまとめは従来通り、駒場博物館TAが行う。調査対象の見直しを、調査の過程で行い、次回ミーティングで検討することに。電話利用について、細かい内容を詰める。→電話マニュアルに反映。

2013年4月3日（水）～4月4日（木）比較文学比較文化コース オリエンテーション

→1日目に委員会の紹介、懇親会での勧誘。2日目に、駒場博物館及びカタログ資料室の見学会。（これに先立ち、紹介資料の増補を副委員長に



依頼、歴代委員のコメント追加)

2013年4月9日(火)～4月23日(火) 2013年度展覧会調査

→5月、集計により完成した表を各方面へ送付、共有。

6月22日(土) 10周年祭に関する最初の打ち合わせ

今橋映子先生、委員長、副委員長、王詩芬さんによるミーティング。副委員長を中心に、準備始動。

→関係記録(名簿、年表、展覧会・カタログ評一覧、コメント一覧)作成へ。

7月1日(月) 第3回ミーティング

議題 1) 今年度展覧会調査の報告及び課題(加来杏沙子さん、農頭美穂さんより)

→完全な情報が得られない館についてどうするか、教職員にご協議頂くことに。

2) 10周年祭について(岩瀬慧さんより)

→告知の範囲(学会レベルまで)を決定。ポスター、チラシ作成(岩瀬慧さん)

→寺田寅彦先生のお取次ぎにより、「比較芸術フォーラム」として比較コースの公式行事に承認。

3) ブログ執筆要項作成報告(西田桐子さんより)

→どのような読者を想定するのか、タグの使い分けなどについて議論。

→議論の内容を要項に反映。

4) 展覧会一覧表の活用について(辛重官さんより)

→Webサイト開設の提案 →今後の検討課題に。

2013年7月7日(日)～7月21日(日) 院生専門分野アンケートの実施 →8月18日完成、全体に共有。

8月 東大比較文学會 Web サイトのバージョンアップに伴う確認作業

→伊藤由紀さん、堀江秀史さん、西田桐子さん、岩瀬慧さん、松枝佳奈さんに行って頂く。

9月 相談役の交代、新体制へ

10月3日（木）引継ぎ会

以下が、各年度の年度別テーマとなっている。

年度	年度別テーマ
2004	カタログ資料室開室準備、従来の資料室の整理
2005	カタログ資料室開室準備、調査エクセル作成
2006	カタログ資料室開室準備、ホームページ開設準備
2007.6.25 資料室開室	
2007	文学館プロジェクト（調査対象に文学館を組み込む）
2008	文学館プロジェクトと従来調査の合併
2009	カタログ資料室利用方法改善
2010	調査エクセル更新、震災調査
2011	調査エクセル調整、ブログ活用
2012	10周年祭企画実行、ブログ活用
2013	カタログ資料室広報、10周年記録完成

#### 駒場博物館 資料室担当スタッフ一覧

2004年4月1日～2005年1月31日	陳岡めぐみ
2005年4月1日～2005年7月31日	松尾薫
2005年8月1日～2006年9月30日	杉山菜穂子
2006年10月1日～2009年6月30日	小泉順也
2009年7月1日～2011年3月31日	川野恵子
2011年4月1日～2012年3月31日	安永麻里絵
2012年4月1日～2013年7月31日	申ミンジョン
2013年10月1日～2014年3月31日	中津海裕子

## 2.2 『比較文學研究』掲載歴代展覧会・カタログ評題目一覧

### 『比較文學研究』掲載歴代展覧会・カタログ評題目一覧（敬称略）

\*2013年10月現在、全52本。

うち院生委員会推薦分は11本（題目の末尾に\*を付す）。

なお、現在把握できる範囲で巡回展情報を掲載した。

#### 第74号（1999年）

##### 今橋映子 「薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち」展

徳島県立近代美術館（1998年10月17日～1998年12月6日）、

そごう美術館（1999年2月5日～1999年3月7日）、奈良そごう美

術館（1999年4月8日～1998年4月25日）

##### 藤田みどり 「大ザビエル」展

東武美術館（1999年6月10日～1999年7月20日）、岡崎市美術博物館

（1999年9月11日～10月24日）

#### 第75号（2000年）

##### 中村和恵 「伝統と抽象—アジア系アメリカ人芸術家 1945-1970」展

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（1999年4月11日～1999年5月30日）、

福岡アジア美術館（1999年7月17日～1999年8月22日）、秋田市立千

秋美術館（1999年9月4日～1999年10月11日）

##### 西槇偉 「東アジア／絵画の近代—油画の誕生とその展開」展

宇都宮美術館（1999年9月12日～1999年10月20日）

#### 第76号（2000年）

##### 稲賀繁美 「岡倉天心とボストン美術館」展

名古屋ボストン美術館（1999年10月23日～2000年3月26日）

##### 内藤高 「近代京都画壇と『西洋』」展

京都国立近代美術館（1999年8月6日～1999年9月12日）

### 第77号 (2001年)

#### エリス俊子 「田中恭吉」展

和歌山県立近代美術館 (2000年4月15日～2000年5月21日)、町田市立国際版画美術館 (2000年6月3日～2000年7月9日)、愛知県美術館 (2000年7月15日～2000年8月27日)

#### 小泉順也 「ラファエル・コラン」展

静岡県立美術館 (1999年9月10日～1999年10月24日)、福岡市美術館 (1999年10月30日～1999年11月28日)、島根県立美術館 (1999年12月4日～2000年1月16日)、千葉そごう美術館 (2000年2月9日～2000年3月5日)、愛媛県美術館 (2000年4月8日～2000年5月7日)、東京ステーションギャラリー (2000年5月27日～2000年7月2日)

### 第78号 (2001年)

#### 平石典子 「ナビ派と日本」展

新潟県立近代美術館 (2000年9月15日～2000年11月5日)

#### 藤岡伸子 「万国博覧会と近代陶芸の黎明」展

愛知県陶磁資料館 (2000年4月8日～2000年5月21日)、京都国立近代美術館 (2000年11月28日～2001年1月28日)

### 第79号 (2002年)

#### 金森修 「日本の博物図譜」展

国立科学博物館 (2002年10月6日～2002年11月11日)

### 第80号 (2002年)

#### 山屋真由美 「天上の青―瀧口修造の造形的実験」展

富山県民会館美術館 (2001年7月19日～2001年9月24日)、渋谷区立松濤美術館 (2001年12月4日～2002年1月27日)

#### 永井久美子 「ネットワークが産んだ花鳥画―江戸の異国趣味 南蘋風大流行」展

千葉市美術館 (2001年10月30日～2001年12月9日)

#### 上垣外憲一 「心の交流 朝鮮通信使」展

京都文化博物館 (2001年4月28日～2001年6月3日)

第 81 号 (2003 年)

李健志 「蚊帳の外—「2002 年ソウルスタイル 李さん一家の素顔の暮らし」展および「韓国大衆文化」展」

国立民族学博物館 (2002 年 3 月 21 日～2002 年 7 月 16 日)

新潟新津市美術館 (2002 年 2 月 8 日～4 月 7 日)、世田谷美術館 (2002 年 5 月 25 日～2002 年 7 月 14 日)、高松市美術館 (2002 年 8 月 2 日～2002 年 9 月 1 日)、福岡アジア美術館 (2002 年 11 月 21 日～2003 年 2 月 2 日)

沼野恭子 「極東美術研究の突破口—「極東ロシアのモダニズム 1918-1928」展」

町田市立国際版画美術館 (2002 年 4 月 6 日～2002 年 5 月 19 日)、宇都宮美術館 (2002 年 5 月 26 日～2002 年 7 月 7 日)、北海道立函館美術館 (2002 年 7 月 16 日～2002 年 9 月 1 日)

第 82 号 (2003 年)

鈴木禎宏 「「生活」を「芸術」として—西村伊作の世界」展

神奈川県立近代美術館鎌倉館 (2002 年 4 月 3 日～2002 年 5 月 19 日)、和歌山県立近代美術館 (2002 年 5 月 31 日～2002 年 7 月 14 日)

宮坂奈由 「ダンス！20 世紀初頭の美術と舞踊」展

栃木県立美術館 (2003 年 2 月 9 日～2003 年 3 月 23 日)

第 83 号 (2004 年)

松井貴子 「カタログとしての書籍、書籍としてのカタログ—「明るい窓：風景表現の近代」展」

横浜美術館 (2003 年 2 月 1 日～2003 年 3 月 30 日)

西原大輔 「韓国国立中央博物館所蔵 日本近代美術」展

東京藝術大学大学美術館 (2003 年 4 月 3 日～2003 年 5 月 11 日)、京都国立近代美術館 (2003 年 5 月 20 日～2003 年 6 月 29 日)

西槇偉 「小山正太郎と「書ハ美術ナラス」論争の時代」展

新潟県立近代美術館 (2002 年 10 月 4 日～2002 年 11 月 17 日)

第 84 号 (2004 年)

山中由里子 「アレクサンドロス大王と東西文明の交流」展

東京国立博物館 (2003 年 8 月 5 日～2003 年 10 月 5 日)

大澤吉博 特別展「江戸大博覧会—モノづくり日本」

国立科学博物館 (2003 年 6 月 24 日～2002 年 8 月 31 日)

李健志 「平常展と企画展—韓国の中の二つの展覧会から」

第 85 号 (2005 年)

徳盛誠 「21 世紀の本居宣長」展

川崎市市民ミュージアム (2004 年 9 月 18 日～2004 年 11 月 7 日)、四日市

市立博物館 (2004 年 11 月 16 日～2005 年 1 月 10 日)

大嶋仁 「チャイナ・ドリーム」展

兵庫県立美術館 (2004 年 7 月 24 日～2004 年 8 月 29 日)、福岡アジア美

術館 (2004 年 9 月 4 日～2004 年 10 月 17 日)、新潟県立万代島美術館 (2004

年 10 月 23 日～2004 年 12 月 5 日)

内藤高 「万国博覧会の美術」展

東京国立博物館 (2004 年 7 月 6 日～2004 年 8 月 29 日)、大阪市立美術館

(2004 年 10 月 5 日～2004 年 11 月 28 日)、名古屋市博物館 (2005 年 1

月 5 日～2005 年 3 月 6 日)

第 86 号 (2005 年)

佐藤宗子 「ピノッキオ—その誕生から現代まで」展

高松市美術館 (2004 年 4 月 9 日～2004 年 5 月 9 日)、呉市立美術館 (2004

年 5 月 15 日～2004 年 6 月 27 日)、和歌山県立近代美術館 (2004 年 7 月

18～2004 年 9 月 23 日)、おかざき世界子ども美術博物館 (2004 年 10 月

2 日～2002 年 11 月 28 日)

小林将輝 「フルクサス」展\*

うらわ美術館 (2004 年 11 月 20 日～2005 年 2 月 20 日)

## 第 87 号 (2006 年)

### 前島志保「アジアのキュビズム：境界なき対話」展\*

東京国立近代美術館 (2005 年 8 月 9 日～2005 年 10 月 2 日)、徳寿宮美術館 (韓国、2005 年 11 月 11 日～2006 年 1 月 30 日)、シンガポール美術館 (2006 年 2 月 18 日～4 月 9 日)

### 坂本輝世「アラビアンナイト大博覧会」展

国立民族学博物館 (2004 年 9 月 9 日～2004 年 12 月 7 日)

### 西川正也「ジャン・コクトー展—サヴァリン・ワンダーマン・コレクション」

北海道立近代美術館 (2005 年 4 月 19 日～2005 年 5 月 29 日)、日本橋三越本店新館 7F ギャラリー (2005 年 7 月 20 日～2005 年 7 月 31 日)、山梨県立美術館 (2005 年 8 月 6 日～2005 年 9 月 7 日)、大丸ミュージアム KOBE (2005 年 9 月 14 日～2005 年 9 月 26 日)、岩手県立美術館 (2006 年 4 月 8 日～2006 年 5 月 21 日)

## 第 88 号 (2006 年)

### 陳岡めぐみ「Alternative Paradise—もうひとつの楽園」展

金沢 21 世紀美術館 (2005 年 11 月 5 日～ 2006 年 3 月 5 日)

### 曾我晶子「ベルリンと東京—都市と文化の遠近法」展\*

森美術館 (2006 年 1 月 28 日～2006 年 5 月 7 日)、ベルリン新国立美術館 (2006 年 6 月 8 日～10 月 3 日)

## 第 89 号 (2007 年)

### 手島崇裕「マンダラ展—チベット・ネパールの仏たち」展

国立民族学博物館 (2003 年 3 月 13 日～6 月 17 日)、名古屋市博物館 (2004 年 4 月 10 日～7 月 4 日)、埼玉県立近代美術館 (2006 年 7 月 8 日～9 月 24 日)

### 今野喜和人 「詩人の眼・大岡信コレクション」展

三鷹市美術ギャラリー (2006 年 4 月 15 日～2006 年 5 月 28 日)、静岡・グランシップ (2006 年 8 月 3 日～2006 年 8 月 28 日)、福岡県立美術館 (2006 年 11 月 8 日～2006 年 12 月 10 日)、足利市立美術館 (2007 年 2 月 10 日～2007 年 3 月 25 日)

**第90号 (2007年)**

**安藤智子 「イメージの迷宮に棲む 柄澤斎 展—「一冊の本」としての展覧会、そして「一冊の本」の記憶としての展覧会カタログ」\***

神奈川県立近代美術館 鎌倉 (2006年10月28日～2006年12月24日)

**佐藤温 「近代文人のいとなみ」展**

成田山書道美術館 (2006年11月3日～2006年12月23日)

**伊藤由紀 「森鷗外と美術」展**

島根県立石見美術館 (2006年7月14日～2006年8月28日)、和歌山県立近代美術館 (2006年9月10日～2006年10月22日)、静岡県立美術館 (2006年11月7日～2006年12月17日)

**第91号 (2008年)**

**前島志保 「アジアのキュビズム」ソウル展**

韓国 国立現代美術館 徳壽宮美術館 (2005年11月11日～2006年1月30日)

**深見麻 「大正シック」展\***

東京都庭園美術館 (2007年4月14日～2007年7月1日)、尼崎市総合文化センター (2007年7月28日～2007年8月26日)、静岡県立美術館 (2007年9月8日～10月14日)、尾道市立美術館 (2007年10月20日～12月16日)

**第92号 (2008年)**

**佐藤光 「青山二郎の眼」展**

MIHO MUSEUM (2006年9月1日～2006年12月17日)、愛媛県美術館 (2007年1月26日～2007年3月4日)、新潟市美術館 (2007年4月6日～2007年5月13日)、世田谷美術館 (2007年6月9日～2007年8月19日)

**李健志 「文化的記憶—柳宗悦が発見した朝鮮と日本」展**

韓国 一民美術館 (2007年11月10日～2007年2月25日)



### 第93号 (2009年)

#### 林久美子「パリへー洋画家たち百年の夢」展と「黒田から藤田へーパリの日本人画家」展\*

東京藝術大学大学美術館 (2007年4月19日～2007年6月10日)、新潟県立近代美術館 (2007年6月23日～2007年8月5日)、MOA美術館 (2007年8月17日～2007年9月30日) / パリ日本文化会館 (2007年10月24日～2008年1月26日)

### 第94号 (2010年)

#### 川島健「十二の旅ー感性と経験のイギリス美術」展\*

栃木県立美術館 (2008年4月27日～2007年6月22日)、静岡県立美術館 (2008年9月12日～10月26日)、富山県立近代美術館 (2008年11月2日～12月23日)、世田谷美術館 (2009年1月10日～3月1日)

#### 西田桐子「沖縄・プリズム 1872-2008」展\*

東京国立近代美術館 (2008年10月31日～12月21日)

### 第95号 (2010年)

#### 大嶋仁「未来をひらく 福澤諭吉展」について

東京国立博物館 表慶館 (2009年1月10日～2009年3月8日)、福岡市美術館 (2009年5月2日～2009年6月14日)、大阪市立美術館 (2009年8月4日～2009年9月6日)、神奈川県立歴史博物館 (2009年8月22日～2009年9月23日)

#### 吉岡知子「躍動する魂のきらめきー日本の表現主義」展\*

栃木県立美術館 (2009年4月26日～2009年6月15日)、兵庫県立美術館 (2009年6月23日～2009年8月16日)、名古屋市美術館 (2009年8月25日～2009年10月12日)、岩手県立美術館 (2009年10月20日～2009年11月29日)

**第96号 (2011年)**

**定村来人「江戸の粹・明治の技 柴田是真の漆×絵」展\***

三井記念美術館 (2009年12月5日～2010年2月7日)、相国寺承天閣美術館 (2010年4月3日～2010年6月6日)、富山県水墨美術館 (2010年6月25日～2010年8月22日)

**寺田寅彦「フランスの浮世絵師 アンリ・リヴィエール」展**

石川県立美術館 (2009年7月24日～2009年8月23日)、神奈川県立近代美術館 葉山 (2009年9月5日～2009年10月12日)、

**第97号 (2012年)**

**水野太朗「異色の芸術家兄弟：橋本平八と北園克衛」展\***

三重県立美術館 (2010年8月7日～2010年10月11日)、世田谷美術館 (2010年10月23日～2010年12月12日)

**堀江秀史「映像と展覧会：第三回恵比寿映像祭の試み」**

東京都写真美術館その他 (2011年2月18日～2011年27日)

## 2.3 院生委員による展覧会・カタログ寸評精選集

委員会ブログ掲載展覧会寸評精選集（全54本のうち8本）

[http://www.todai-hikaku.org/bb/exhibition\\_all.html](http://www.todai-hikaku.org/bb/exhibition_all.html)

### 目次

1. [寸評]「揺らぐ近代——日本画と洋画のはざまに」展 評者：永井 久美子
2. [寸評]氾濫するイメージ 反芸術以後の印刷メディアと美術 1960's-70's  
評者：佐々木 悠介
3. [寸評] 東京スカイツリー完成記念特別展「ザ・タワー～都市と塔のものがたり～」  
評者：伊藤 由紀
4. [寸評]第三回恵比寿映像祭 評者：堀江 秀史
5. [おすすめ]殿様も犬も旅した 広重・東海道五拾三次 保永堂版・隸書版を中心に  
評者：林 久美子
6. [寸評]サラ・リプスカ —巨匠の影に 評者：松尾 梨沙
7. [寸評]奇跡のクラーク・コレクション—ルノワールとフランス絵画の傑作  
評者：實谷 総一郎
8. [寸評] ルーヴル美術館展—地中海 四千年のものがたり— La Méditerranée dans les collections du Louvre 評者：岩瀬 慧

### [寸評]「揺らぐ近代——日本画と洋画のはざまに」展

- ・会期：2006年11月7日～12月24日
- ・会場：東京国立近代美術館
- ・評者：永井 久美子

まず、展示作品の質がとても高いことが注目されます。近代絵画の歴史を考えらるうえで頻繁に言及されてきた作品と、「日本画」「洋画」というジャンル分けに適さないがゆえに議論から外されがちであったと思われる作品の両方が、一堂に会していました。

注目は、やはりボストン美術館の小林永濯作品であると思われます。他にも《加藤清正武将図》など、国内の小林作品も出品され、小林永濯再考のよい機会ではなかったかと思います。

全体の展示の流れも、これまでの日本近代美術の議論をふまえた構成となっており、分かりやすいものであったと思われます。本展の位置づけを確認するためにも、カタログに参考文献一覧が 付されていれば、より明解であったのではないかと感じました。

カタログでは、作品自体の解説や文献の紹介よりも、作者の人物紹介に重点が置かれている印象がありましたが、本展は、人物研究という意味でも 作品の選び方が大変興味深いものであったと思われます。例えば横山大観の《迷児》や浅井忠の《鬼ヶ島》など、一般的に「日本画家」と考えられている人の「洋画」、「洋画家」と考えられがちな人の「日本画」が並び、作者も簡単にジャンル分けできるものではないことが、会場でも一目で分かるように示されていたと思います。

なお、今回のカタログ及び会場のパネルのテキストを通して、本展で取り上げられた作品をどう語るか、そのことばの問題の難しさを感じました。例えば、狩野芳崖の作品を語るにあたり、伝統的な「日本画」にはなかった顔料が云々と論じると、芳崖の時代にすでに「日本画」というジャンルが確立していたかのように解されてしまうが、ではどのように語ればよいのか。また、「日本的な油絵」「日本的な洋画」といったとき、「日本的」というものは具体的にはどのようなものを前提に考えるべきなのか。

これらのことばの難しさは、単なる語彙の問題ではなく、ジャンル分けしにくいものの扱いにくさ、その扱いにくいもの、すなわちジャンル分けされた結果、見落とされがちであったものをどう語るのかという困難さを示していると思われます。本展は、ジャンル分けがもたらした問題を、具体例をもとに浮き彫りにした機会でもあったと思われます。

(2007年1月12日投稿)

#### [寸評] 氾濫するイメージ 反芸術以後の印刷メディアと美術 1960's-70's

- ・会期：2008年11月15日～2009年1月25日
- ・会場：うらわ美術館
- ・評者：佐々木 悠介

うらわ美術館で開催中の「氾濫するイメージ 反芸術以後の印刷メディアと

美術 1960's-70's」展を観てきました。

いろいろ珍しいものを見られる、というのが第一印象です。雑誌の表紙はまだしも、ポスターのようなものは古くなればなるほど、なかなか良い状態で保存されたものを観る機会もないですし、そういう媒体で発表されるアート作品が、その時代の芸術潮流のある側面を確かに現している、という想定（主催者の意図は、つまるところそういうことではないかと思うのですが）はやはり大切なことに思われます。

カタログは、担当学芸員の森田一さんによる解説的(?)な論文一つと、展示図版、年譜や参考文献からなっており、面白い図版が載っているのでいちおう買ってみました(1800円)が、論文はもの足りなく感じました。このような多様な方向性を持った題材であれば、複数の論文が並べて載せられて、異なった視点からの分析が欲しかったというのが一つと、しかしおそらくこの展覧会の構成では、上述の解説的な一本以外は書きようがなかったであろう、というのが一つです。

というのは、この展覧会は印刷メディアというものに目を付けていながら、それらの媒体で図版と同じ程度の重要性を持ち、なおかつ図版との間に相互的な記号作用を持っているはずの文字テキストのほうには、実はほとんど注意を払っていないからです。担当学芸員の論文では「イメージに焦点を当て」ることが再三強調されていますが、印刷メディアのアート作品を考察する上で、これはすでに無理のある前提です。また論文中、〈複製芸術〉とか「イメージの大衆化」といった概説のほうにかなりのページ数が割かれ、なぜこの展覧会で8人の作家を選んだのか(約30名の候補の中から絞ったということですが)、ということに関する説明は十分ではない。それはおそらく説明しようがないからでもあります。そのような構成の展覧会で、たとえば外部の研究者の論文は、書きようがないかも知れません。印刷メディアのアートという重要なものを取りあげ、しかもこれだけの数の(通常では手に入りにくい)作品を集めた展示とカタログは、資料としても貴重であり、それだけでもこの展覧会・カタログの意義は充分にあると思います。しかし同時に、印刷メディアのアートというものを考え、分析する視点はまだまだプリミティブなものかもしれません。会期は1月25日までです。

(2008年11月29日)

〔寸評〕東京スカイツリー完成記念特別展「ザ・タワー～都市と塔のものがたり～」

- ・会期：2012年2月21日（火）～2012年5月6日（日）
- ・会場：江戸東京博物館
- ・評者：伊藤 由紀

2月20日に開催された内覧会に行ってきました。1Fホールで行われた開会式は、竹内誠館長の挨拶、主催・後援等の紹介、PRキャラバン隊「えどはくタワーズ」によるパフォーマンス、常設展示室に設置された「太陽の塔 黄金の顔」の紹介、と続きました。「黄金の顔」の3日間の設置作業を、定点カメラの早回し映像で見せていただいたのが面白かったです。

企画展は全5章構成。プロローグ「二つの塔」ではバベルの塔と仏塔を、第1部「都市の塔の誕生前史」では江戸～明治前半期の鳥瞰図と展望施設を、第2部「近代都市の塔と万博」ではエッフェル塔と浅草十二階（凌雲閣）と初代通天閣を、第3部「新しい時代の塔」では東京タワーと現在の通天閣を、エピローグ「塔が生まれるとき」では東京スカイツリーを、それぞれ取り上げています。

私としては浅草十二階を目当てに見に行ったのですが、意外にその前史の部分が面白かったです。アポリネールのカリグラムよりずっと緻密な「300行からなる300メートルのエッフェル塔」（cat. no. 66）が、エッフェル塔完成のその年に早くも書かれて（描かれて？）いるのには驚きました。

その他にも、建設中の定点写真（cat. no. 62）、ペーパークラフト（cat. no. 69）、双六（cat. no. 73）、世界の建造物を一堂に集めた高さ比べの図（cat. no. 49）など、現代でも定番の塔表象のあらかたが、エッフェル塔の時点ですでに登場しています。ただ、日本の双六（cat. no. 46, 119, 142など）が塔の頂点を文字通りの「上がり」とするのに対し、エッフェル塔のそれは頂点で折り返して地上に戻ったところがゴール、というのは面白いですね。家に帰るまでが遠足です。

双六つながりで、これは笑えない……と思いつつも、ちょっと分かる気がしたのが「大正大震災双六」（cat. no. 165）、震災の翌年の発行です。ふり出しのコマの名前は「ゆり出し」で、サイコロの目に従って「上野公園」「被服廠」などの避難場所に行き、「バラック」「仮住居」などを経て「生命 財産 安全」と書かれた上りを目指します。どの避難場所に逃げた後も、サイコロの目によっては

「死亡」で終わってしまう可能性があるのが厳しいです。

この出品をはじめ、十二階の震災による炎上（大正12年9月1日）とその後の爆破（同23日）を取り上げた一連の展示は、いま見ると重いものでした。爆破を見ていた人々がつい「万歳」と口にして「どつと笑った」、というエピソードを伝える川端康成『浅草紅団』の一節がパネルで引用されていましたが、3・11後のあの奇妙な昂奮状態を経験したいま読み返すと、このエピソードも何か妙に腑に落ちます。

ただ、震災の話題がアクチュアルすぎて、建設当初の輝いていた頃の十二階の印象はいまいち薄れてしまったように思います。浅草オペラへの言及が特になかったことも個人的には残念でしたが、順路の後のほうで思いがけず関連資料を見つけました。通天閣のビリケンさん（cat. no. 279）に関する出品の中に、ビリケン到来当時のブームを伝える資料として、東京歌劇座のお伽歌劇《ビリケンとキューピー》のプログラム（cat. no. 282-283）が含まれていたのです。大正6年11月の日本館での公演は、ビリケン杉寛、キューピー澤モリノ、主役級らしき少女二人が天野喜久代に河合澄子という豪華キャスト。

会場の展示方法については、また双六の話で恐縮ですが、紙をめくると建物の内部が見える（cat. no. 119）、気球乗りのスペンサーの姿が見える（cat. no. 142）などのギミックが、閉じられた状態のまま展示されていたのは残念でした。せめて開いた状態の参考図版があれば（カタログには掲載）。音声ガイドには、通常のお堅い解説のほかに、別トラックで山田五郎氏のコラムが収録されています。

カタログはA4版208ページ。出品作品の図版のほか、担当学芸員の岩城紀子氏（江戸東京博物館）、船越幹央氏（大阪歴史博物館）の短い論文、細馬宏通氏（『浅草十二階 塔の眺めと〈近代〉のまなざし』）、橋爪紳也氏（『明治の迷宮都市』）など、納得の人選によるエッセイを収録しています。

大阪歴史博物館に巡回（5月23日～7月16日）。

（2012年2月22日）

### [寸評]第三回恵比寿映像祭

- ・会期：2011年2月18日～2月27日
- ・会場：東京都写真美術館
- ・評者：堀江 秀史

東京都写真美術館にて現在開催されている映像祭に行ってきました。美術館全体が解放空間になっていて(無料で入れます！ 但し、一階映画館の上映作品を観るにはお金がかかります)、三階から展示がスタートします。

三階は、映像表現の様々な可能性を探求した芸術=実験的な作品が主でした。昨年カンヌでパルム・ドールを受賞したアピチャップン・ウィーラセクタン(受賞作は『ブンミおじさんの森』、3月5日渋谷シネマライズにて公開)の映像がまず最初に飾ってあり、劇映画の他、こうした実験的映像も作っているのかと、感心しました。その他、映像として興味深かったのは、太極拳を舞う白髪の男性が、その動きに合わせて徐々に横に伸びていく(言葉では伝わりにくくてすみません。もっともだからこそ、映像としておもしろいと思うのですが。カタログ掲載の写真を見れば、だいたい掴めます)、ダニエル・クルックス《動きの中に静寂を求め》です。他に《走る男》(ルームランナーで走る若者が、同様に横に広がっていくもの)も展示されていますが、やはり前者の方が、ゆったりとした太極拳の動きと映像加工の緩慢な速度がマッチしている点で、面白いものだったと思います(《走る男》はスローモーションに加工した映像をさらに加工するものだったと記憶しています)。コンセプトとして興味深いのは、ダヴィッド・クレルボの《幸福なモーメントの諸断面》。静止画の映像の数々が、デジタル・フレームのように、巨大なスクリーンに一定時間ずつ映しだされていきます。特異な点は、作品に付された解説にもありますように、それらの静止画が、同一の時空での出来事(マンションに囲まれた中庭で、昼間陽が射すなか、子供たちがボール遊びをする。それを大人たちが見守る。ボールはちょうど放物線の頂点あたりにあり、皆の視線はそこに集中している)を様々な角度から写していること。そして、同一時空であるならば、別の視点から写せば撮影者の姿が写真に写り込んでいるはずなのに、それらの写真には撮影者が一切写り込んでいないことです。同一の時空であることへ観る側の意識を寄せさせるのは、空中で静止したボールと、光によって生じる影の角度、この二点でしょうか。このことに気づくと、違和感が生じ、「ある種暴力的な視線を彼(彼女)らに注ぐことになって



しまう」(カタログ及び当日のパネルより) わけです。「暴力的な視線」とは、映像の謎解き、つまりはあら探し、のことでしょう。撮影者が写っていないのならばシチュエーションを綿密に規定した上で、同じことを繰り返し行って何度も撮影したに違いない。ならば、表情やしぐさには、どんなに頑張っても、微妙な差異があるはずだ。その証拠を探し出してやれ。という思考の流れにそって、鑑賞者は、その、穏やかな日常の光景という写真内容を通り越して、あどけない少女の顔のアップ写真にすら、少女の顔をみるのではなく、前の写真との差異を見つけだそうとしてしまう。しかし、それは一定時間ずつ映し出されては消えていくので、決定的な証拠を見つけだすには時間が足りない、あるいは多すぎる(前の写真の記憶をなくさないようにするためには、少々長すぎる)。または、アルバム写真のように、前のページに戻ってじっくり観たいという欲求にかられる。時間とともに流れゆく映像はリニアで、観る側にそのような自由を渡してはくれない。観る側は余計にいらいらしながら、目の前の静止画が移ろいゆくさまをただ観ているだけ。解説には、作者は「作品の長さや編集のテンポ、音響効果、鑑賞環境など、観客の体験を左右する諸要素を厳密に設計する」とあるので、こうした「いらいら」は、全て織り込み済みであり、この作品には、極めて完成されたコンセプトが凝縮されていると云えます。写真に対する問題提起のほか、ユーザーにとってのデジタルとアナログの問題(デジタル書籍と紙媒体など)の融合された、大変面白い作品でした。

二階は、意識下の映像化をコンセプトとした作品が多かった気がします。マニュアルな作業で作られるアニメーションの、制作に使われた(あるいはその過程で生まれた)美術品の展示が主ですが、内容的なテーマとしては三階よりも二階に近い映像作品も三本(スーパーフレックス、水越香重子、ハヴィア・テレーズ)、上映されていました。スーパーフレックスの作品は、無人のマクドナルドが徐々に水で埋まっていく過程が、おそらく各所に置かれた定点カメラ(水によってそれぞれがだんだんぷかぷかと揺れ動くのですが)によって記録され、それらが編集されたものです。世界に何が起こったのか、人々はどこへ行ったのか、等々、そこには一切の説明がありませんが、映画の予告編、あるいはオープニングを観ているような、高密度な期待感、緊張感が持続していく、不思議な作品でした。

二階から地下一階の展示への移動は、エレベーターではなく階段をお薦めします。しりあがり寿の『白昼夢夫人』が小型スクリーンで階段の随所に並べてあ

るからです。白黒で3分程度の各作品は、モダンな洋館で昼寝をする夫人がナンセンスな夢をみる、というのですが、ほのかなエロティシズムとナンセンスが混淆して、非日常への橋渡しの役割を果たします。

これらを見ながら、辿りつく地下一階の展示室では、まず最初に、同じくしりあがり寿の「ゆるめ～しょん」シリーズ作品が小型スクリーンに映し出すかたちで幾つも並べられています。薄暗い照明の中、天井からベールを垂らして、その中に各スクリーンを閉じ込めており、映像の光がベールを照らしてその部分をぼうっと浮かび上がらせる、『竹取姫』のお姫様の登場シーンのようなことになっています。近づけば、その中にいるのが「おじさん」である点も、落差があって面白い。文字通り（今回の映像祭のタイトルは、「デイドリーム・ビリーバー！！」です）、白日夢空間へと迷い込んだ感があります。その他ここでは、社会と映像との接点を捉える作品の展示があります。ネットへの匿名投稿における主婦の言葉を女優が語る森弘治の《Re:》、ネット内空間「セカンド・ライフ」を使ったツアオ・フェイの《RMB》。最後には、米軍のバーチャル映像を使った軍事訓練を扱ったハルン・ファルッキ《シリアスゲーム》。

映像は夢を現実化した表現である、というコンセプトに沿って、テクノロジー的な側面から始まり（三階）、意識の底をえぐるような映像の力にも焦点をあて（二階）、展示が進むごとに映像によって夢と現実の境界があいまいになっていく（二階～階段～地下一階）。かといって、それは芸術の問題だけに止まってはいない。社会的、政治的な利用もされる（地下一階）。それを批評的な眼差しで捉えるのもまた、映像である（《シリアスゲーム》のように）。このような流れが、随所に凝らされた工夫でじわじわと浮かび上がってくる展示でした。

報告の最後に要望を二点。レセプションでは、二階の吹き抜け空間で、恵比寿駅と逆側のエントランスを背にして、開催の辞が述べられたほか、今回出品されているアーティストの方たちの紹介がありました。これまでも何度かこちらの内覧会には伺わせて頂きましたが、毎回大変な混雑で、肝心の、挨拶をされる方々がわれわれと同じ高さの床に立っておられるため、姿が見えないことが多いです。本当に簡単なものでも良いので、ちょっとした舞台（例えば、しりあがり寿さんがピンク地に黒文字というスタイリッシュな映像祭パネルの前で、仮にビールケースをひっくり返して壇としてご挨拶されていたら、とても恰好良かったのではと思います——冗談でなく）をしつらえてもらえれば、遠目からでもお顔が拝見できるのですが。

もう一点、先日、今一度観覧に行ったのですが、そのときは同じ場所でアーティストの方がラウンジトークをされていました。それほど混雑もなく、ラウンジに用意された椅子に座って聞かせて頂けたのですが、せっかくのお話なのに、吹き抜けの場所だからか、正面の椅子に座っているとマイクの声が拡散して聞きづらいという難点がありました。三階にもスピーカーが設置してあり、その声を聞けるようになっているのですが、そちらで聞いた方がよっぽど聞き取りやすい。これはもうひとつ、残念なこととして挙げておきたいと思います。

写美から出てすぐ、ガーデンプレイスの中庭あたりでは「オフサイト展示」もされているほか、チェコ・センター、日仏会館などとタイアップして様々なイベントが開催されているようです（詳しくは写美にある映像祭のチラシをご参考ください）。カタログ、展示は全て日本語と英語の二ヶ国語表記です。カタログは、展示のみならず、オフサイト展示、上映映画、イベント全てのカタログを兼ねています。ここでは紹介できませんでしたが、一階映画館上映の映画も貴重なものばかり、もうあと少ししか時間はありませんが、チケットが売り切れてなければ、観賞をお薦めします。

写美での映像祭は今週末までで終了しますが、お時間があえば是非、この楽しいお祭りを観にいらしてください。

※ここでご紹介した作品名は、簡略化したものもあります。正確な情報はカタログをご覧ください。

(2011年2月25日)

[おすすめ] 殿様も犬も旅した 広重・東海道五拾三次 保永堂版・隸書版を中心に

- ・会期：2011年12月17日～2012年1月15日
- ・会場：サントリー美術館
- ・評者：林 久美子

投稿が遅くなってしまいましたが、サントリー美術館、広重展の内覧会に行ってきました。本展では、歌川広重の代表作《東海道五拾三次之内》（天保4（1833）年頃制作、一般に「保永堂版東海道」）と、およそ15～20年後に再び広重によって描かれた《東海道》（画中の題が隸書で書かれている「隸書版東海道」）が一举に公開されています。

江戸日本橋から京都までの55カ所、全ての宿場の「保永堂版」と「隸書版」が並べて展示され、両者の違いを如実に見て取ることができます。同じ場所でありながら、構図や色味、モチーフなどに様々な違いが見られ、広重の工夫の跡が伺えます。また、「保永堂版」と「隸書版」の比較に加えて、刊行当初の〈初摺〉と、後に摺り方などが変えられた〈後摺〉との比較や、〈初版図〉と、図柄が一部変えられた〈変わり図〉の比較が行われている宿場もありました。

「保永堂版」の〈蒲原 夜之雪〉や〈庄野 白雨〉などは、誰もが一度は目にしたことがある広重の代表作だと思いますが、今回の比較展示により、実は「隸書版」の方が、実際の風景により即したものであったことを知り、驚きました。

所々に配された、名所をモチーフとした屏風や工芸品を除けば、ひたすら浮世絵の展示が続き、一見単調にも思える本展ですが、実際は江戸期の旅の様子が生き生きと描かれた作品に導かれて、私もまるで旅をしているような気持ちになりました。

年末年始、旅行に行く余裕がないという方は、六本木で東海道旅行を楽しむというのはいかがでしょうか。

(2011年12月21日)

## [寸評]サラ・リップスカ 一巨匠の影に

- ・会期：2012年8月19日(日)～2012年11月4日(日)
- ・会場：ワルシャワ国立美術館（クルリカルニャ）
- ・評者：松尾 梨沙

ポーランドの首都ワルシャワには、美しい宮殿がいくつかが点在しています。中心から南方5km程のところにある、クルリカルニャ（Królikarnia、もともここでウサギ（królik）狩りが行われていたことに由来）という宮殿もその一つですが、ここは現在、ワルシャワ国立美術館の分館（ドゥニコフスキ記念彫刻美術館）として機能しています。周辺は広々とした庭園となっており、「黄金の秋」といわれるこの時期には、見事な紅葉でとりわけ美しい空間となります。ただいまここで開催中の展覧会「サラ・リップスカ 一巨匠の影に」に行き参りました。

サラ・リップスカ（Sara Lipska, 1882-1973）はポーランド北東のムワヴァ（当時ロシア領）という町で生まれ、後にパリで活動したユダヤ人女性芸術家です。当初、その頃女性としては難関だった彫刻家を目指して、ワルシャワ美術学校に入学しますが、そこで当時教鞭を執っていた、のちのポーランド彫刻界の巨匠クサヴェリ・ドゥニコフスキ（Xawery Dunikowski, 1875-1964）に、その感性と美貌を見初められます。二人の親交は彼が亡くなるまで続きますが、法的な婚姻関係を結ぶことはなく、サラは彼との間にもうけた娘とともに、1912年よりパリのモンパルナスに移り住みました。

以降、彫刻、絵画、インテリアデザイン、劇場の装飾、服飾、ポスターデザイン、挿絵など、あらゆる分野で作品を遺し、またディアギレフやヘレナ・ルビンスタイン、ポール・ポワレらとのコラボでも活躍しました。昨年パリのポーランド図書館（Bibliothèque Polonaise de Paris）では彼女を取り上げた展覧会が行われましたが、これまでポーランド国内で彼女の活動は事実上知られておらず、今年はワルシャワ国立美術館150周年を記念し、フランス大使館などの後援も得て大きく取り上げられることとなったようです。

展示作品数はそれほど多くありませんでしたが、上述の通り様々なジャンルの展示がありました。油彩では、しなやかなラインと明るい色調がマティスを想わせるところもあり、とくに鳥と植物のモチーフが目を引きまします。

服飾デザインにおいても、比較的ゆったりとしたフォームに、やはり花のモチーフが顕著です。また、メシアン《異国の鳥たち》の音楽をもとにしたバレエ

の衣装が企画されたこともあり、あらゆる鳥の衣装デザイン（水彩画）が遺されていたことから、やはり鳥と花は、彼女にとって主要なモチーフであり続けたように思いました。鳥の衣装デザインにおける、翼や羽の色彩感と曲線美は、その他のジャンルにおける彼女特有の描き方にも通じるところを多く感じます。

彫刻でも、角張ったデザイン性のあるドウニコフスキの作品に対して、リプスカは細かい曲線まで描き出し、実に写実的です。とくにアルトゥール・ルービンシュタインの頭像は、肌の質感やたるみ方まで驚くほど良く表現され、まるで本人そのものです。

芸術のジャンルは幅広い一方で、一つのジャンルに優れる人は、他の方面でも劣らぬ才能を見せるものだと、最近つくづく思います。以前ここで取り上げた村山知義も、国は違うもののリプスカとほぼ同時代で、やはり非常にマルチに活躍した人でした。こうした傾向が時代特有のものかどうか、私にはわかりかねますが、両者とも全ジャンルに共通する独自性を感じさせてくれるのは、非常に興味深い点です。こんな感じで、日本で出会えない芸術家の軌跡を辿る機会が、私の留学の楽しみを一つずつ増やしてくれています。

カタログはA4版、232頁。前半にポーランド語とフランス語による解説、後半に図版と、分けてまとめられています。むしろ図版一つ一つにもう少し詳細な解説を付けて欲しかったです。展覧会は11月4日で終了となります。

(2012年11月1日)

## [寸評]奇跡のクラーク・コレクション—ルノワールとフランス絵画の傑作

- ・会期：2013年2月9日（土）～5月26日（日）
- ・会場：三菱一号館美術館
- ・評者：實谷 総一郎

クラーク・コレクションはミシン製造会社 I. M. シンガーミシンの共同設立者の孫、ロバート・スターリング・クラークとパリのコメディ・フランセーズの女優だったフランシーヌが二人で蒐集したコレクションだ。夫妻のコレクションをもとに1955年に設立されたクラーク美術館は、研究所や教育機関を付設し、世界中の学生や研究者の注目を集める重要な視覚芸術の総合施設となっている。30点のルノワールの作品がとくに有名なクラーク・コレクションだが、これまで館を離れまとまって紹介されることがなかった。今回は、2010年から始まった改修工事に合わせ、作品を各国に巡回させる企画が立ち、日本でも開催されることとなったのである。展示作品数73点のうち日本初公開が59点、アメリカ旅行のついでに気軽に行けるような立地にない美術館であることも考えると、大多数の人にとって今回を逃すと一生見る機会がないと思われる作品が多い。

本展はコレクション展の部類に入るが、作品の質が高く名品展の性質も有する。そうした展示にふさわしく、美術館の側から特定の方向付けが行われることはなく、バルビゾン派からポスト印象派までのゆるやかな年代順の配置と主題やテーマの親近性による自然な整理があるのみとなっている。各作品の個性に任せ、また鑑賞者の自由な見方に任せる展示である。身体表現など特定のものに意識を向けたり、一つの作品をじっくり見たり、画風を比較したりと、各画家の個性が集中する名品の多い本展は多様な見方を誘発する。とくに数の多かったルノワールの作品はやはり、画面に膜が張ったような独特なトーンによって際立って見えた。それはとりわけ《フルネーズ親父》や《シャトゥーの橋》で感じられた。その中で、この膜がない青年期の自画像は異質に見えた。横にある老年期の自画像が他の絵と同様のトーンで描かれているのを見ると、画家と自身の様式との複雑な関係が想像され、興味深かった。

美術館の側からの全体的な方向付けはない一方で、個人コレクションならではの蒐集家の趣味が一定のカラーとして表れてもいる。ルノワールの絵画と言えば、時に暑苦しいほど暖色を用い、印象派らしく輪郭をあいまいにしたものが多いが、展示品ではそれとは反対に温度の低く、より鮮明な作品が多いように思

った。こうした特徴はルノワール以外の作品にも見られ、実際、海、川、雨、花瓶といった水が関わる作品や青の美しい作品が強く印象に残っている。ジャン＝レオン・ジェロームの《蛇使い》はそうした傾向の一つの典型かもしれない。近景に描かれた裸体の蛇使いの女の向こう側に重厚な壁がある。その壁面全体に、水のように透明感のある繊細な青が塗られていた。ただ率直に感嘆してしまう色彩には、美術館に足しげく通ってもなかなか出会えるものではない。クラーク夫妻は青を好んだだけでなく、青を見る目があったのだと実感した。

ルノワール、ドガ、モネ、ピサロの作品が目立つ中で、一点だけ展示されている画家たちの作品も気になるものが多かった。ドーミエのコミカルな油彩《版画収集家たち》、自宅の庭師をボヘミアン詩人のように魅力的に描いたカロリュス＝デュラン《画家の家の庭師》、歪んだ花瓶の曲線と水の透明感で人目を引くマネ《花瓶のモスローズ》、そして最後に展示されるボナールの《犬と女》には目に心地よい色彩、構成とデフォルメがある。

「奇跡のクラーク・コレクション」展は良作が多く、純粋に絵を楽しめる展覧会だった。会期は5月26日までと長いが、せっかくなら自分のペースでじっくり見られるように、混雑する終了間際は避け、早い時期に行くのを勧めする。

(2013年4月7日)



〔寸評〕ルーヴル美術館展—地中海 四千年のものがたり— La Méditerranée  
dans les collections du Louvre

- ・会場：東京都美術館
- ・会期：2013年7月20日～9月23日
- ・評者：岩瀬 慧

「ルーヴル美術館展—地中海 四千年のものがたり— La Méditerranée dans les collections du Louvre」は2013年7月20日～9月23日までの間、JR上野駅から徒歩7分の、昨年リニューアルオープンした東京都美術館で開催されており、高級感のある洗練された展示室で楽しむことができる。

「序 地中海世界—自然と文化の枠組み」「Ⅰ 地中海の始まり—前2000年紀から前1000年紀までの交流—」「Ⅱ 統合された地中海—ギリシア、カルタゴ、ローマ—」「Ⅲ 中世の地中海—十字軍からレコンキスタへ(1090-1492年)—」「Ⅳ 地中海の近代—ルネサンスから啓蒙主義の時代へ(1490-1750年)—」「Ⅴ 地中海紀行(1750-1850年)」の計6章構成になっており、さらに各章の下に細かく節が立てられており、綿密に構築されている。監修はジャン＝リュック・マルティネズ新館長、学術協力は高階秀爾先生、三浦篤先生で、主催には日本経済新聞社、NHK、NHKプロモーションが加わる。本展の最たる特徴は、ルーヴルの「古代ギリシア・エトルリア・ローマ美術」「古代エジプト美術」「古代オリエント美術」「イスラーム美術」「絵画」「彫刻」「美術工芸品」「素描・版画」の8美術部門すべてが横断的に参画していることである。壺、皿、スプーン、モザイク、彫刻、絵画など合計273点と大規模な展示になっており、鑑賞の際には時間配分に気をつけたい(要所のみで1時間、通常で2時間、じっくり観れば3時間はかかるだろう)。カタログも充実した内容になっており論文、解説に加え巻末の「地中海関連年表」と「地中海についての主な日本語文献」(ともに小池寿子、棚瀬沙和子編)まで付加してあり、参照されるべきものである。

全体として、ある作家やあるテーマの芸術作品を集めた一般的な展覧会というより、地中海沿岸の文化からみる交流をテーマにした文明史展といった印象である。世界史の知識がある程度前提にはなるものの、テーマ設定が独自であるが故に今日の我々の眼に新鮮なものである。展示形式にも工夫が凝らされていることも重要だが、気になった作品を幾つか挙げてみよう。まず、《エウロペの神話》のテラコッタの壺は、既に古代ギリシアで発達していた身振りの表現の

優雅さに驚かされる。大陸（ヨーロッパ）の名前の由来となったエウロペはフェニキア（現レバノン）王の娘で、白い牡牛に姿を変えたゼウスに連れ去られた。東方に由来するものとしてのギリシア観であり、両者の深い繋がりを表している。独立独歩に発展したギリシア文明という歴史認識の誤りに陥らずに済む。他にも《ひげのある男の顔の形をしたペンダント》や《魚形アリュバロス（小型の香油入れ）》など、日々の生活を彩り、楽しませてくれる「モノ」は眺めるだけでも飽きが来ない。300年頃の床モザイクは文字通り床に貼られたものを見下ろす、という実際の配置に近い形式での展示は見逃せない。

次に《ローマ皇帝ルキウス・ウェルスの子ルキッラの巨大な頭部》は160cmの頭部（！）というその大きさにまず圧倒される。しばらく眺めていると、「こんなに大きな頭部を作らせた皇帝は、一体どういう気持ちだったのだろうか？」という疑問が湧いてくる。皇帝が妻を慕う気持ちの現れなのか、時空を超えて彼女の美貌を留めおくためなのか。整った目鼻立ち、大きな眼、正面をまっすぐ見据える女性としての強い性格、大理石は細部にいたるまでさまざまことを物語っているようだ。また、交流の主眼を置いた展覧会、という意味では、《キリストのモノグラム IHS が記された大皿》は、15世紀イスラーム陶器がラスタール彩で IHS（イエスのギリシア名の省略形）を書き入れている点は興味深い。《東方と西方のキリスト教会統一の象徴である教会を支える、聖使徒ペテロとパウロ》の絵画もまた、本展のテーマを如実に体現している例である。最後に、画家のアントワーヌ＝アルフォンス・モンフォールによる《シリアの馬》（1837年）は、馬の黒鹿毛に眼を奪われる。馬、牛などの動物は本展を通して重要なモチーフであり、それぞれの表現の異同に注目してほしいものである。文化は独立して生まれてくるのではなく、相互の関係性から生み出されるものであり、その実態を4000年の歴史から「地中海」を固定点としながら俯瞰する本展の試みは、功を奏しているといえるだろう。

見学後は東京芸大の間を通り過ぎ、言問通りの信号を渡った角にある「カヤバ珈琲」で休憩するのがよい。2階に上がると座敷になっており、イサム・ノグチのコーヒーテーブルでみつ豆をいただきながら涼を取りたい。

(2013年8月2日)

## 2.4 歴代委員へのインタビュー集

歴代委員に以下の質問についてインタビューを行いました。

- ①研究テーマ
- ②委員会での担当役職
- ③活動を振り返って

### 1. 倉員 宏明（修士課程修了、インフォコム株式会社）

①日本近代文学を専門とし、修士論文では堀辰雄の最初期における詩と小説の関係を扱いました。

②院生専門調査

③院生専門調査と展覧会調査の仕事を中心に関わらせていただきました。作業自体は決して華やかなものではありませんが、エクセル表での作業や、美術館への電話での問い合わせなどは、就職後の仕事の良い練習にもなったと思います。また美術系のことに疎かった私には、様々な新しい知識を得る機会ともなりました。

### 2. 藤田 千紘（修士課程修了、国立国会図書館）

①近代日本における本の装丁と、装丁についての言説をテーマにしていました。修士論文では、昭和初期の装丁論を「工芸」という観点に注目しつつ検討しました。

②ブログ活用担当

③委員会での調査によって全国の展覧会状況を知ることができ、関心ある展覧会の発見が容易になっただけでなく、いま日本でどのような展覧会が開かれているかを一望できた点が非常に有益でした。また、委員会ブログの活性化を担当し、利用者増加のための企画の実現に携わったことも良い経験になりました。

### 3. 川辺 和将（修士課程修了、毎日新聞社）

①クロード・モネの市場戦略

②副委員長

③幅広い人脈を築くことのできるところが、カタログ委員会の魅力のひとつです。ゼミや分野の垣根を越えて、普段関わることのできないたくさんの方と知り合いになる機会がありました。友達を増やしたり、イベントを企画したり、お酒を通じて先輩方と仲良くなったりといったことで、様々な方面の知識を身につけることができました。

### 4. 定村 来人（博士課程）

①幕末明治期に活動した絵師、河鍋暁斎を中心に、19世紀後半の日本美術を研究しています。

②委員長

③私が委員長を務めさせていただいた年は、駒場博物館の図書館をより利用しやすくすることがプロジェクトの一つとしてありました。美術を研究する者にとっては、駒場博物館の図書館は貴重な資料の宝庫です。スタッフの方々との話し合いを通して、利用者としての立場と運営側の立場の両方から、図書館のあり方を考える経験ができたことが貴重でした。また、気さくな駒場博物館のスタッフの方々と、今でも続く良い関係を築くことができたのも大変よかったです。カタログ委員会を通して、違うゼミの人たちとのつながりをつくることも魅力です。分野の違いを超えた研究を目指す比較研究室の方針を体現した、刺激的な場がそこにはあります。

## 5. 岩瀬 慧 (博士課程)

①カバネルの作品論、及びアカデミスム絵画研究

②見学会企画

③展覧会調査は慣れない作業でしたが、やってみると良い経験になりました。訪れたことのない美術館についての知識を得て、巡回展情報をうまく探せるようになりました。世田谷美術館の見学会を企画した際は、学芸員の方から貴重なお話を伺いました。帰りに用賀駅ちかくのジョナサンに立ち寄り、デザートを頂きながら委員のみなさまと楽しい時間を過ごしたのも良い思い出です。

## 6. 堀江 秀史 (博士課程)

①寺山修司、クロスジャンル論 (文学と写真、映画)

②2011-12 年度委員長、その他

③2007 年度以降、現在まで委員会に所属しております。最初は何をやっているのかすら分からないところからスタートしましたが、そこから数年を経て、振り返れば非常に大きなものを得ていたことに気づきます。自分にとって近いようで実はとても遠い「美術」の分野に、「展覧会」を糸口として曲がりなりにも関わりを持ち続けられたこと、それを論じても良いと感じられること、そして、ゼミ横断の院生同士の交流が出来たこと、これらは、当初は気づきませんでした。後々になって非常に得難い経験であり実感であると感じました。今後の発展に何が必要か考え実行することが、この御恩返しになるかなと、今は考えています。

## 7. 任 ダハム (博士課程)

①植民地期の日韓映画における都市「京城」(現ソウル)表象、植民地期の日韓映画交流

②今年度には、留学生相談役を担当させていただきました。

③はじめて展覧会調査に参加した時のことがまだ記憶に新しいですが、あれからすでに6年が経ってました。委員会の構成員は毎年変わりましたが、各期委員長の方々をはじめとした委員の皆さんの熱意と誠実さには、いつも刺激をいただいております。そして、皆さんの努力によって出来上がった展覧会調査一覧表を見る時が、私にとっては、最も委員としてのやりがいを感じる瞬間でした。今年で10周年を迎えるカタログ委員会の「歴史」を、半分以上共有できたことを、とても嬉しく思います。

## 8. 信岡 朝子 (東洋大学)

①日米動物表象の比較研究(19世紀～20世紀)、環境表象としての写真、医療と文学の関わり(闘病記文学を中心に)

②第1期委員長、及びその後の委員会での展覧会調査

③最初の立ち上げの時から関わらせていただきましたが、当初は美術や展覧会のことなどまったく分からず、美術史に詳しい他の院生の方々に頼りまくって、何とかまわしていたように思います。委員の皆さんと、どのご専門の方にどの展覧会の評を書いてもらうかを話し合う中で、新しい発見や思いもかけない組み合わせなどが出てくるのは、創造的で楽しい作業でした。この委員会を通じて、展覧会カタログやポスター、チラシに至るまで、美術展というものを総合的なプロジェクトとして見る視点を養っていただいたと思います。

## 9. 林 久美子 (博士課程)

①世紀転換期 (1890～1920 年代) の日仏文化交渉史

②委員長、副委員長、ブログ・ML 管理

③院生委員会初期の頃から参加させていただき、年々、活動が組織立って、着実に成果をあげていく様子を、古くからのメンバーの一人として、大変嬉しく感じておりました。委員会の行事では、駒場博物館資料室の開室式や、国立新美術館図書室の見学会などが、深く印象に残っています。美術館や展覧会についての情報を得られることはもちろん、私にとって委員会活動は、ゼミや学年の異なる院生の方々と交流できる貴重な機会でもありました。

## 10. 韓程善

①文学と映画の比較芸術、江戸川乱歩

②文学館プロジェクト

③もう 6 年前になりますね。2007 年度の文学館プロジェクトは、日本全国の文学館リストから、どこの文学館の企画が充実しているかを把握する作業でした。みんなで全国の文学館を分けて調査し、担当した地域の文学館の特徴など調査した感想を話し合いました。特に留学生であった私にとって日本の文学館を把握する作業は、非常に貴重な経験でした。文学館プロジェクトは、私の留学時代の忘れられない思い出の一ページです。

## 11. 小泉 順也（一橋大学 准教授）

①ポスト印象派を中心としたフランス近代美術史

②普通の委員+駒場博物館担当

③展覧会調査や資料室に収められた展覧会カタログを通して、自分の知らない博物館や美術館が日本にはたくさんあり、そこで多彩な活動が繰り広げられていることを実感できたように思います。頭の片隅に館名が残っていれば、近くを訪れたときに、どうしても気になって立ち寄ってしまいます。そうした切っ掛けを与えてもらいました。

## 12. 佐々木 悠介（駿河台大学ほか 非常勤）

①カルティエ=ブレッソンと二十世紀の写真言説（フランス語圏と英語圏）

②2005 後期-2006 前期：委員長

③まだ委員会を立ち上げて間もなかったもので、マニュアル化されていない部分も多々ありました。比較芸術の理念からも、美術系以外の院生の方にも多く参加して頂きたいということで、できるだけ委員会の作業が繁雑にならないようにということを意識していたような気がします。2006 年夏の引継ぎ会では、それまでの院生評執筆者をお呼びして合評会を企画しました。懇親会は神泉の七輪焼きのお店で企画したのですが、換気の調子が悪くて煙濛々、皆さんに申し訳なく思ったことを覚えています。そのお店はもうなくなりました……。



### 13. 井口 俊（博士課程）

①19世紀フランス絵画史、特にエドゥアール・マネと第二帝政期の美術批評

②委員（2008-09）、委員長（2010-11）

③展覧会カタログは私の専門である美術史を学ぶ上での必須文献ですが、委員会に所属するまではその構成や形式、装丁などの面に特段気を配ることもなく、ただ収録内容にばかり注意を向けていました。委員会の活動を通じ、「展覧会カタログ」というジャンルのもつ豊かさに目を開かされたことが、一個人としてはもっとも大きな収穫です。また、委員長を務めさせていただいた年度には震災があり、例年とは異なる形での展覧会調査を行いました。委員のみなさまのご協力により完成した資料は将来貴重な証言となることと思います。

### 14. 安藤 智子（國學院大学、清泉女子大学、法政大学非常勤講師）

①アルフォンス・ルグロ 英仏美術交流史

②委員長

③先輩の陳岡さんが担当なさった国立西洋美術館でのコロー展を今橋先生と皆さんと見学に行ったことが印象に残っています。その日は夏の大変暑い日で、見学会後に銀座のビアホール行き、今橋先生とコローの描く女性の二の腕が妙に生々しいと語り合わせていただいたことが記憶に残っております。全く頼りない委員長の私を支えていただきありがとうございました。カタログ評院生委員会でのゼミの枠を越えての皆さんとのおつき合いが、現在に至るまで私の研究の糧となっています。

## 15. 伊藤 由紀（博士課程）

①日本におけるオペラ受容

②展覧会調査、ブログ活性化、副委員長

③それまで展覧会は「目に付いたら見に行く」程度の関心だったのですが、委員会で展覧会調査に参加したことをきっかけに、自分の研究に関係のありそうな展覧会を自分から探して見に行く習慣ができました。また、2年間かけた調査票のフォーマット変更では、「ちょっとアイデアを投げてみたら、一緒に考えてくれる人や専門的なスキルのある人が集まってきて、予想もしなかったほど良いものが完成する」という共同作業のダイナミズムを味わいました。その後、他の共同研究プロジェクトで複数人でのデータベース入力に参加したときも、ここで得たノウハウが役に立ちました。

## 16. 永井 久美子（比較文学研究室助教）

①絵巻物、後白河院文化圏

②副委員長、相談係

③いろいろありましたが、「東京—ベルリン／ベルリン—東京」展（東京会場：森美術館、ドイツ会場：ベルリン国立美術館、2006年）が、今でも印象に残っています。『比較文学研究』第88号へのカタログ評掲載を推薦することになった展覧会であったほか、この展覧会をきっかけに、駒場博物館の収集方針のひとつ（海外の図録のうち、日本巡回展のあるものを積極的に集め、日本版との内容を比較すること）を提案させて頂き、それを承認してもらえたことは、とても光栄でした。駒場博物館の蔵書の拡充をみるにつけ、初期メンバーとして委員会に関われたこと、立ち上げ期からの活動が継続されていることを、嬉しく思っています。

## 2.5 歴代院生委員名簿 (2004-2013 年度)

区分	名前	専門	所属
1.美博資料室歴代担当TA	陳岡めぐみ	近代フランス美術	国立西洋美術館 主任研究員
	杉山菜穂子		三菱一号館美術館 学芸員
	松尾薫	クロス・ジャンル研究（視覚芸術）、 ポール・セザンヌ、風景画	乃村工藝社

2.院生委員会歴代委員			
	安藤智子	アルフォンス・ルグロ	國學院大学、清泉女子大学、法政大学 非常勤講師
	井口俊	エドゥアール・マネ、19世紀フランスの美術批評・カリカチュア	比較・博士
	伊藤由紀	明治・大正期の文学者のオペラ受容、翻訳定型詩	比較・博士
	李賢峻	日本の昭和文芸、崔承喜（チェ・スンヒ）	小樽商科大学 准教授
	任ダハム	日本近代文学、映画、植民地期の日韓メディア	比較・博士
	岩瀬慧	アレクサンドル・カバネル、19世紀フランスのアカデミズム絵画	比較・博士
	王詩芬	雑誌研究、台湾の女性誌	比較・修士
	太田直樹	日本近代文学、比較文学、岩野泡鳴、小栗風葉	比較・修士
	小野瀬宗一郎	比較文学、ポストコロニアル研究、Oscar Wilde, Seamus Deane, Frantz Fanon	
	加来杏沙子	近代日本美術、比較芸術、牧野義雄、日英博覧会	比較・修士
	川澄亜岐子	比較文学比較文化、ラフカディオ・ハーン	比較・博士
	川野恵子	ディアギレフ・バレエ団、ヴァスラフ・ニジンスキー	
	川辺和将	比較芸術、美術史、ドーミエ、ドン・キホーテ	毎日新聞社
	神林尚子	幕末・明治初期における江戸戯作、仮名垣魯文の草双紙（合巻）	比較・博士
	韓氷	創作版画運動、印刷文化、複製芸術	文美学・研究生
	金志映	比較文学・比較文化、戦後日本文学におけるアメリカ表象	比較・博士
	金暁美	日・韓の国語教科書の比較（翻訳文学と紀行文を中心に）	
	金ヒョンギョン	言語学、日本文学、大江健三郎の初期作品、narratology	
	倉員宏明	日本近代文学、比較文学、堀辰雄、神西清	インフォコム株式会社
	小泉順也	19世紀フランス美術史、日仏美術交流史	一橋大学 准教授
	小坂井玲	美術史、比較芸術、ジャポニスム	山梨県立美術館
	小村優太	哲学、靈魂論、知性論、イブン・シーナー	学振PD

区分	名前	専門	所属
2.院生委員会歴代委員（続）	近藤貴盛	共通詩学、フランス批評研究、ステファヌ・マラルメなどの象徴派詩	
	蔡暉映		比較・博士
	齋藤達也	フランス近代美術史、ジャポニズム、エルネスト・シェノー、エドガー・ドガ	比較・博士
	佐々木悠介	比較芸術（写真と文学、仏語圏と英語圏）	駿河台大学、法政大学ほか（非常勤）
	定村来人	比較文化、美術史、河鍋暁斎	比較・博士
	佐藤弥生	比較芸術、美術批評、歴史学、ポール・ドラロッシュ、中庸派	比較・修士
	丁相珉	比較文学、大江健三郎の小説における語り	比較・博士
	實谷総一郎	フランス近代文学、美術批評、エミール・ゾラ	比較・修士
	辛重官	比較文学、安部公房	比較・博士
	申ミンジョン	比較芸術、日韓文化交流史、韓国と日本の近代絵画	比較・博士
	須田彩香	フランス文学、比較文学、アルフォンス・ドーデ	比較・博士
	高瀬純平	倫理学、社会哲学、ユルゲン・ハーバーマス	埼玉県庁
	高橋祥子	比較日本研究、学問史、悉曇学、寂厳	科研研究員
	立花拓	比較文学、比較詩学、ヴィニシウス・チ・モラエス	
	丁熹貞		比較・博士
	手島崇裕	平安時代を中心とした対外関係史、仏教史	韓国慶熙大学校 助教授
	刀根直樹	比較日本研究、お雇い米国人教師、E. W. クラーク、中村正直	比較・修士
	永井久美子	クロス・ジャンル研究（絵画と文学）、比較日本文化論、絵巻物、後白河院文化圏	比較・助教
	中井真木	文化史（服装）、比較日本研究、服装制度、身分秩序、公家と武家	早稲田大
	中村真衣子	フランス近代美術史、ポール・セザンヌ、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ	比較・修士
	西田桐子	戦後日本語小説、人種表象、マイノリティー表象、黒人	比較・博士
	二村淳子	比較文化、美術史、東アジアの20世紀美術	比較・博士
	農頭美穂	フランス近代美術、装飾芸術、比較芸術、ピエール・ボナール、ナビ派	比較・修士
信岡朝子	クロス・ジャンル研究（特にイメージ研究）、環境史、シートン、ディズニー、動物物語、自然写真、絵本、児童文学・文化	東洋大学 専任講師	
朴恩恵	日本近代文学、比較文学、谷崎潤一郎	比較・修士	

区分	名前	専門	所属
2.院生委員会歴代委員（続）	林久美子	クロス・ジャンル研究（テキストとイメージ）、クロス・エリア研究、フェリックス・レガメー、日仏文化交渉史	比較文学比較芸術コース教務補佐、東洋大学非常勤講師
	林三博	視覚文化論、比較芸術、写真、対外対内プロパガンダ、日本像、博覧会	
	潘郁紅	クロス・ジャンル研究、手塚治虫、マンガ文化	中共中央党校
	韓程善	クロス・ジャンル研究（文学と映画）、江戸川乱歩	
	檜山智美	インド・中央アジア仏教美術史、比較文学・比較文化、東西文化交渉史、キジル石窟の仏教壁画	
	深見麻	日米関係史、近代日本画、新版画、在米日系移民	
	藤田千紘	日本近代美術史、比較芸術、書籍の装丁、装丁論	国立国会図書館
	古館遼	近現代美術史、比較芸術、アート・マネジメント、アール・ブリュット、写真	比較・博士
	堀江秀史	比較芸術論、映像（写真・テレビ・映画）、寺山修司	比較・博士
	本間友佳	比較文学、翻訳論、江戸川乱歩	比較・修士
	前田佳子	比較芸術論（舞踊学、身体論）、クロスエリア研究、パリ舞踊	国際交流基金
	松枝佳奈	日露文化交渉史、ロシア文学・ロシア文化、大庭柯公、二葉亭四迷	比較・博士
	松尾梨沙	音楽学（楽曲分析）、ポーランド詩学、比較芸術、フレデリク・ショパン	比較・博士
	三上真理子	展示論、写真論、美術館学、オーストリア・ドイツ近現代美術	比較・博士
	宮坂奈由	フランス近代美術史、クロス・ジャンル研究（絵画と美術批評）、印象派絵画(カイクボット)、美術批評	
	安永麻里絵	folkヴァング美術館、カール・エルンスト・オストハウス、カール・ヴィート	比較・博士
	山崎はずむ	アメリカ文学、ノンフィクション、ナラトロジー	比較・博士
	吉岡知子	美術史、原田直次郎、19世紀後半のミュンヘン画壇	埼玉県立美術館
	吉岡悠平	哲学、ヒューム研究、現代メタ倫理学	比較・修士
	米田雄一		歴史民俗博物館
ルチアナ・ドブレ			
3.今橋研究室アシスタント	坂田亜希子		今橋研究室アシスタント
	永尾知佳		今橋研究室元アシスタント／現在＝東京會館ブライダル部

### 3 駒場博物館関係記録

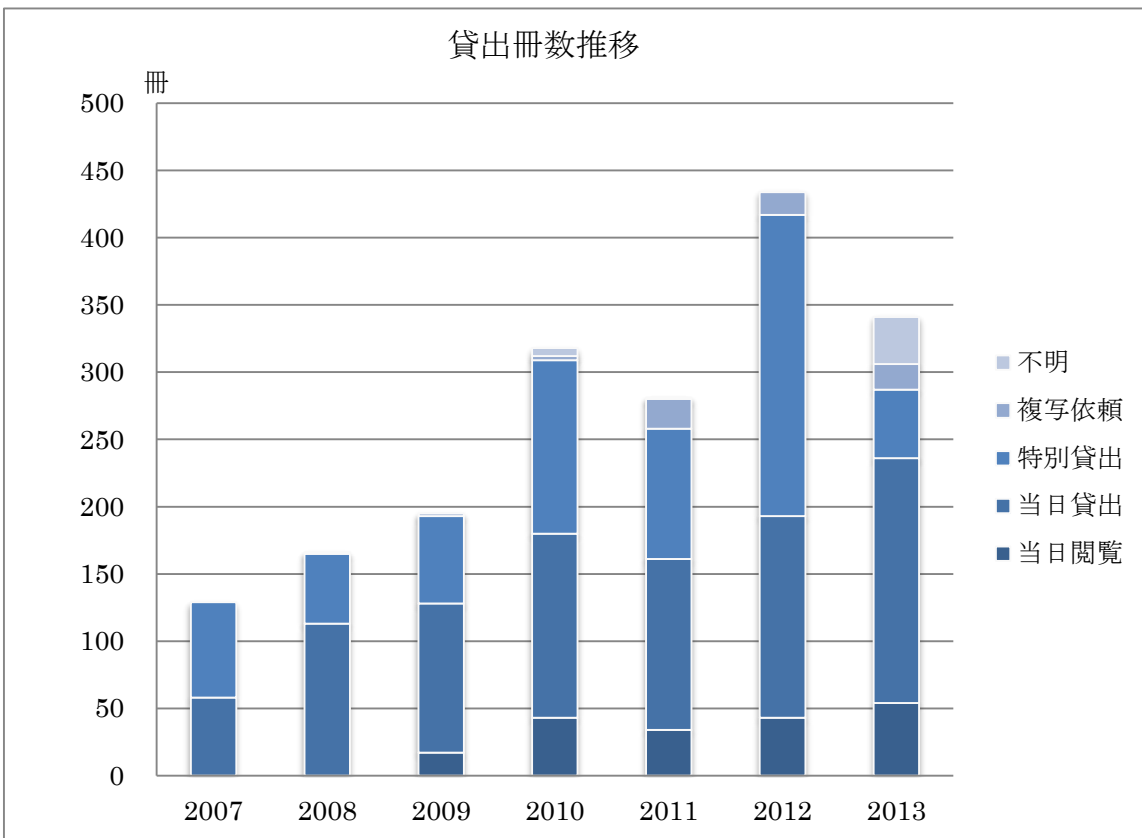
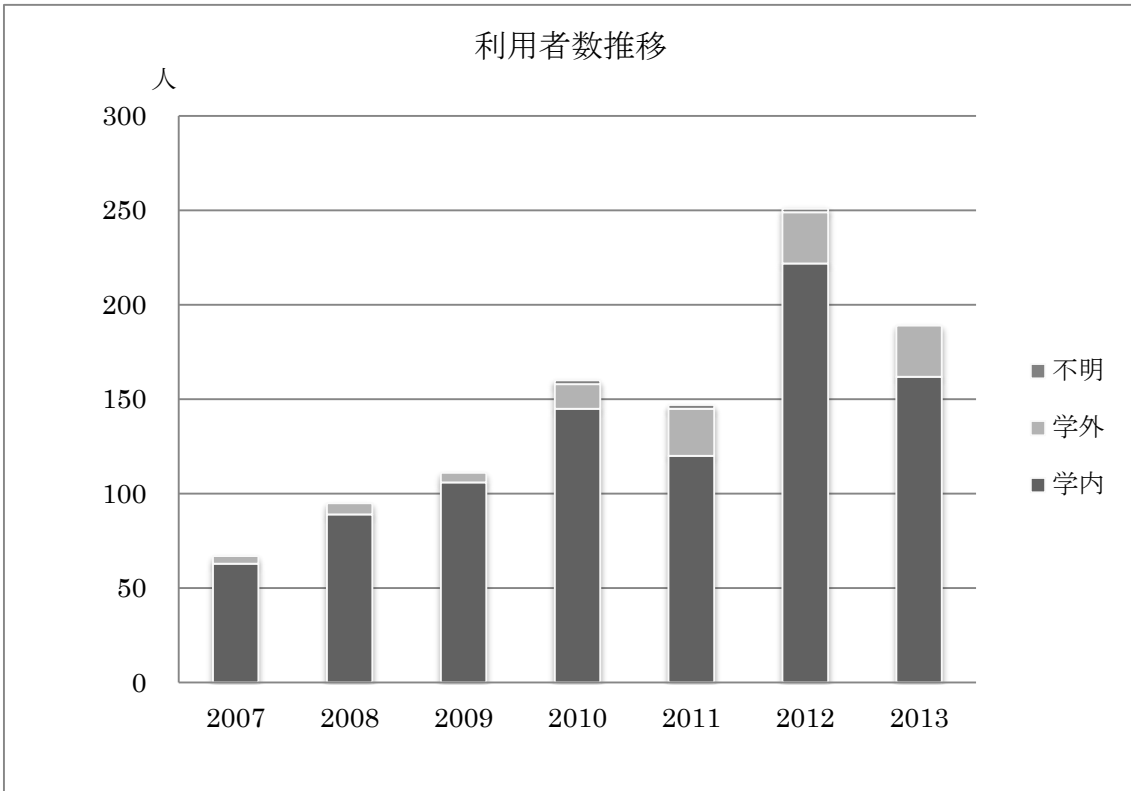


駒場博物館外観(美術博物館・自然科学博物館)

#### 3.1 2006年～2013年までの資料室図書利用統計

利用者数統計、利用者数推移、貸出冊数推移に分かれている。

年度	利用者			利用者 合計	利用方法					利用図書 合計
	学内	学外	不明		当日閲覧	当日貸出	特別貸出	複写依頼	不明	
2007	63	4		67		58	71			129
2008	89	6	0	95	0	113	52	1	0	166
2009	106	5	0	111	17	111	65	2	0	195
2010	145	13	2	160	43	137	129	3	6	318
2011	120	25	2	147	34	127	97	22	1	281
2012	222	27	2	251	43	150	224	17	0	434
2013	162	27	0	189	54	182	51	19	35	341



3.2 年度別 OPAC 登録図書冊数 (2014 年末日現在)

	冊数	カタログ冊数(内数)
<b>洋書合計</b>	<b>816</b>	<b>326</b>
1990	1	
1991	2	
1992	21	3
1995	45	3
1996	10	
1997	1	
2001	1	
2002	1	
2006	6	3
2007	31	10
2008	3	3
2009	17	10
2010	282	156
2011	130	74
2012	79	39
2013	186	25
<b>和書合計</b>	<b>11,893</b>	<b>8,883</b>
1991	23	
1992	9	
1993	20	
1995	24	7
1996	6	
1997	7	
1998	31	2
1999	9	1
2000	1	1
2001	13	9
2002	3	
2004	4	2
2005	301	298
2006	1,970	1,968
2007	1,587	1,490
2008	293	292
2009	1,280	1,013
2010	1,584	1,059
2011	1,766	881
2012	1,502	647
2013	1,460	1,213
<b>総計</b>	<b>12,709</b>	<b>9,209</b>
雑誌種類数	786	



### 3.3 資料室紹介記事

美術館図書室 SIG 通信

## 研究教育に直結した資料室として一駒場美術博物館および資料室見学記

安藤 智子

2009年6月25日、東大駒場美術博物館見学会に参加させていただいた。2004年の全面リニューアル直後の「色の音楽・手の幸福ーロラン・バルトのデッサン」展以来、5年ぶりにうかがった。正門を入ると正面に時計台のある1号館、そこを中心に左右対称に双子のような建物が、900番教室と右手の駒場美術博物館である。

はじめに今橋映子先生から、東大駒場美術博物館の成り立ちや変遷、さらに資料室オープンに至るまでの経緯についてお話しいただいた。その後、特任研究員の坪井久美子氏と共に資料室をご案内いただく。

こちらは、2007年6月に開室した展覧会カタログに特化した資料室であり、蔵書はすべて、東京大学オンライン蔵書目録(OPAC)並びにNACSIS Webcatで検索可能となっている。閲覧利用できるのは、東京大学に所属する教職員、院生、学生などに限られている。展覧会カタログの取蔵という点では、一昨年開館した国立新美術館資料室や東京都現代美術館図書室などの広範かつ大規模なものはいくつかあるが、あくまで研究教育に直結した学際的展覧会に重きをおいていることは、他と一線を画している。開催館ごとに整理、配架されており、決して広くないながらも充実した内容とわかりやすい配置となっている。

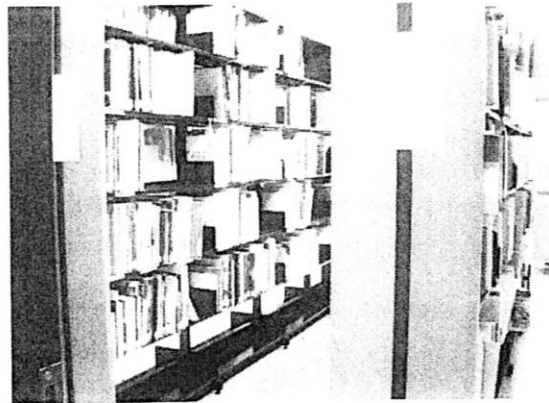
特筆すべき制度として、「展覧会・カタログ評院生委員会」がある。これは、2004年に比較文学比較文化研究室の在学生によって、若手研究者の執筆の機会を拡大するという目的で組織された。活動内容は、全国の美術館・博物館・文学館で開催される展覧会から比較文学比較文化研究と関わるような学際的企画展をピックアップし、その展覧会カタログと併せて批評するものである。評論は、『比較文学研究』編集委員会の査読を経て、東大比較文学会発行の学術雑誌『比較文学研究』に掲載される。一連の活動のなかで、各館の企画展スケジュールの調査・集計には、駒場美術博物館資料室の協力は不可欠であり、また、委員会が推薦した展覧会や有力な候補にあがった展覧会のカタログは、資料室に納められることとなる。委員にとっては研究の一環としてのすばらしい経験となり、資料室にとっては多彩な専門分野を網羅した委員による蔵書充実となる、合理的なシステムでもあるといえる。さらに学術雑誌ともリンクし

ていて、よく練られた構造になっていると思った。

展覧会の選出検討の際は、年間スケジュールが早く確認できることが重要であり、例年企画スケジュール決定が遅れがちな美術館の館員としては、身の小さくなる話でもあった。

「展覧会・カタログ評院生委員会」の力作を見せていただいた後、折茂克哉氏が展示室をご案内くださった。開催していたのは、東京大学教養学部創立60周年記念「矢内原忠雄と教養学部」。旧制第一高校の図書館であったという由緒ある建物は、ドームを内包する簡素かつ清廉な設計で、静謐な空気を醸しだしており、天井の格子が美しい。所蔵品は旧制第一高校当時の教材、中南米・アジアの考古学資料、今回一部展示している南方の民俗資料、さらに近代日本画、現代美術など多岐にわたる。展示環境を整えるのも、作品の調査・保存をするのも、手作りの工夫が必要な様子。多少の差異はあれ、何処も同じような悩みを抱えていることを実感した。

今橋先生のお話からは、現在の研究に直結した機動力のある資料室を目指しているという強い思いが感じられた。美術館・博物館・図書室の活動では、限られたものの中で、出来ることを日々積み重ねることが重要であると同時に、内部・外部への積極的なアプローチも必要であり、そのことを再認識した見学会となった。



(あんどう ちえこ 出光美術館)  
撮影：山崎美和

安藤智子「研究教育に直結した資料室として一駒場美術博物館および資料室見学記」『アートドキュメンテーション通信』No.83、アート・ドキュメンテーション研究会、2009年、10頁。

## 編集委員 (所属は本誌発行時)

- |        |           |                                     |
|--------|-----------|-------------------------------------|
| ◎西田 桐子 | ——編集とりまとめ | 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程                 |
| ○岩瀬 慧  | ——編集とりまとめ | 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程<br>三菱一号館美術館・学芸員 |
| 古舘 遼   |           | 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程                 |
| 松枝 佳奈  |           | 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程                 |
| 岡野 宏   | (校正)      | 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程                 |
| 山川 剛人  | (校正)      | 東京大学大学院総合文化研究科・修士課程                 |
| 李 範根   | (表紙デザイン)  | 東京大学大学院総合文化研究科・修士課程                 |

## 本誌執筆者・資料提供 (所属は執筆・提供時)

- |        |               |                          |
|--------|---------------|--------------------------|
| 今橋 映子  |               | 東京大学大学院総合文化研究科・教授        |
| 寺田 寅彦  |               | 東京大学大学院総合文化研究科・准教授       |
| 坪井 久美子 | (駒場博物館関係資料作成) | 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館 |
| 松枝 佳奈  |               | 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程      |
| 岩瀬 慧   |               | 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程      |
| 古舘 遼   |               | 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程      |

**展覧会・カタログ評院生委員会 10 周年誌**

---

**【発行日】**

2015 年 3 月 31 日

**【編集者】**

展覧会・カタログ評院生委員会 10 周年誌編集担当

**【発行】**

展覧会・カタログ評院生委員会

(東大比較文學會)

住所 〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学大学院比較文学比較文化研究室気付

☎ 03-5454-6390

<http://www.todai-hikaku.org/catalogue.php>

協力：

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館

